

炉辺談話総集編

No. 4

2005 年

もくじ

地区組織	1
会長エレクト研修セミナー(PETS)	4
地区協議会	11
2004年手続要覧	17
Service above self 考	22
ロータリー・モットーの変遷	36
四つのテストの解釈	42
カーネル・サンダース	45
ロータリー奉仕理念の変遷	49
50年後の地球環境	52
決議23-34の怪	59
ロータリーの歴史的文献	61
会場監督・SAAの職務	64
RIテーマに寄せて	67
グローバル・ネットワーク・グループ	69
インターシティ・ミーティングIM	73
Service before self	76
決議23-34採択の背景	80
過去の国際大会	
または規定審議会で採択された主な立法案	96
ポール・ハリスと家族	92
社交クラブとしての出発	97
エバンストン帝国	100

50年前のロータリー(クラブ管理)	104
Service, not self の真意	107
ロータリーの綱領新しい翻訳と解釈	115
日本の常識は世界の非常識	122

地区組織

日本に於ける地区組織の肥大化がしばしば話題になっています。全日本ロータリー会員名簿で各地区の組織図を調べると、ガバナー補佐、地区幹事、各種委員会を含めた地区委員の総数は多い地区で 250 名、少ない地区でも 80 名位で構成されているようです。

地区資金、地区活動資金については全体的な統計は公表されていませんが、日本全体で考えれば、かなりの金額が地区組織維持のために使われているものと想像されます。

私たちが遵守しなければならないことは、RI 定款、RI 細則、標準ロータリークラブ定款に明記されている規約のみであって、「地区組織」に関する項目は、この中には記載されていませんから、すべてガバナーが必要に応じて決めればよいこととなります。ガバナー要覧を見ると、一応基本的な地区組織図が記載されていますが、地区の必要に応じて、ガバナーが独自に定めるべきであることが記載されています。

ただし、ガバナーは地区唯一の RI 役員という立場上 RI 理事会の決定事項を守らなければなりません。RI 理事会の決定事項を纏めたものが「The Rotary Code of Policies ロータリー章典」であり、この中から地区組織に関して定めている項目を抜粋すると以下通りです。しかしこれらの内容のほとんどは推奨であって、強制的な義務ではありません。

19.060 ガバナー補佐

DLP を採用してガバナー補佐を設置することが推奨されていますが、これは義務ではありません。ただし、DLP を採用しなければ、ガバナー補佐研修に関する RI からの補助金は支給されません。ガバナー補佐の任期は 3 年を越えてはなりません。選考の条件、任務などについては詳細な取り決めがありますが省略します。

19.070 地区幹事

RI 理事会は、ガバナーが、ロータリー全般や地区の諸会合に詳しい会員を、最高 5 年の範囲で地区幹事に任命して、地区内の諸会合の設営、会しかし方は、確かに理想的かも知れませんが、世界レベルで見れば少数派なのです。

19.080 パスト・ガバナーの諮問委員会

パスト・ガバナーは諮問委員としてガバナーやガバナー・エレクトを援助するように奨励されています。しかしガバナー地区管理に対してガバナーの権限を妨げる行動をすることは厳しく禁止されています。

21.010-21.060 地区委員会

RI 理事会が設置が推奨している地区委員会は、規定情報委員会、ロータリー財団委員会、ロータリー地域社会共同隊小委員会、WCS 委員会、青少年活動委員会、青少年交換委員会、新世代委員会、地区社会奉仕委員会、地区親睦活動委員会です。昨年度までは推奨されていた、会員増強・拡大委員会、広報委員会、環境保全委員会の設置は除外されています。

日本においてはどの地区もほぼ同じような地区委員会構成になっていますが、最近では委員会の統廃合や縮小を試みる地区もあるようです。外国では極めて多彩な委員会構成をしている地区もあり、面白い例では、地区内のもめごとを処理する「火消し委員会 Firemen's Committee」を設置している地区もあります。

会員数が減少し、地区資金の増額もままならない昨今の状況を考えれば、思い切って地区組織を縮小する必要があるかも知れません。

ある会合で、「昨年は職業奉仕委員を務めたお陰で、かなり職業奉仕について理解することができました。」という発言があり、これに対して、地区の委員会は情報を各クラブに提供するために設置しているのであって、委員を教育するために設置しているわけではない。地区委員は各種セミナー

や情報提供の場で、リーダーとしての役割を果たす実力を持っている少数
精鋭で構成すべきだという意見もあり、これにも一理があるようです。

2005.1.1

会長エレクト研修セミナー(PETS)

会長エレクト研修セミナー(PETS)に関する取り決めを、ロータリーの規約に基づいてご紹介いたします。PETS 実施に当たっては、次の事項に留意してください。

- ① 実施主体はガバナー・エレクトであり、ガバナーではありません。次期地区研修リーダーとよく相談して効果的なプログラムを策定の上、実施してください。
- ② 会長エレクトの参加が義務づけられており、バナー・エレクトからの免除を受けずに、PETS に出席しなかったり、免除されても指定の代理が PETS に出席しなかった場合は、クラブ会長に就任することができません。
- ③ 3 月中に 1 日半のセミナーを開くことが推奨されています。日本では 1 日しか開催していない地区が多いようです。

国際ロータリー細則

15.030. 会長エレクト研修セミナー(PETS)

理事会が決定した通り地区内会長エレクトを指導、訓練するために、PETS を開くものとするが、多地区合同の PETS でも差し支えない。PETS は、毎年、なるべく 3 月中に開くものとする。ガバナー・エレクトが PETS に対し責任をもつものとする。PETS は、ガバナー・エレクトの指示および監督の下に、計画、実施するものとする。

標準ロータリークラブ定款

第 9 条 理事および役員

第 5 節 役員選挙(c) 資格条件。各役員および各理事は、いずれも、本クラブの瑕疵なき会員でなければならない。会長エレクトは、ガバナー・

エレクトから特に免除されない限り、会長エレクト研修セミナーと地区協議会に必ず出席しなければならない。免除された場合は、所属クラブによって指名された代理を必ず派遣しなければならない。この代理人は会長エレクト本人に対し結果報告するものとする。会長エレクトが、ガバナー・エレクトからの免除を受けずに、会長エレクト研修セミナーおよび地区協議会に出席しない場合、あるいは、免除されても指定の代理をこれらの会合に派遣しなかった場合、かかる会長エレクトはクラブ会長に就任できないものとする。

ロータリー章典

23.030. 会長エレクト研修セミナー(PETS)

23.030.1. ガイドライン

RI 理事会は、PETS に関する以下のガイドラインを確立して、ガバナー・エレクトが理事会によって推奨された PETS プログラムの内容を堅持することを奨励する。

23.030.2. 目的

会長エレクト研修セミナー(PETS)は、RI 細則 15.030.節の規定に従って、ガバナー・エレクトの指示と監督の下に地区研修リーダーによって計画され実施される、情報提供のプログラムである。その目的はクラブの会長の次のような点についての能力、知識およびやる気を育成することである。

- クラブの会員基盤を維持、増大させる。
- 地元地域社会および他国の地域社会のニーズに対応するようなプロジェクトを実行し成功させる。
- 金銭的な寄付およびプログラムに参加することでロータリー財団を支援する。

- クラブレベルを超えてロータリーに奉仕する能力のある指導者を育成する。

23.030.3. プログラム

プログラムの前述の目的を達成するために、PETSには次のような構成要素と研修目的を盛り込む。

- 年次テーマの提示

研修目的 年次テーマに提示されている概念を理解すること。来るロータリー年度のクラブ活動のために、テーマを意欲高揚の枠組みとして活用すること。

- クラブ会長の責務

研修目的: ロータリークラブ会長の役割をすべての面において理解すること。その役職に付随した責任と約束事項を十分理解すること。

- 目標の設定

学習目的 目標設定の重要性と効果的な目標の特性を理解すること。来るロータリー年度の会員増強、奉仕活動、ロータリー財団の目標を設定するに当たり、クラブ会員を指導すること。

- クラブ指導者の選任と準備

研修目的 クラブの目標とニーズに基づいたクラブ組織を確立する重要性を理解すること。効果的なクラブ指導者として奉仕するロータリアンにより必要される各種の技能を確認すること。来る年度のために、クラブの指導者チームの準備を整えること。

- クラブ管理運営

研修目的 ロータリー・クラブ運営のための枠組みとして役立つ方針や手続を十分理解すること。地区とRIに対するクラブの管理義務規定を認識すること。クラブを支えるに当たってガバナーとガバナー補佐の役割を理

解すること。クラブ会員に興味を起こさせるクラブ例会プログラムのために新しいアイデアを開発すること。

○ 会員の勧誘とオリエンテーション

研修目的 ロータリー会員のための枠組みとして役立つ方針や手続きを十分に理解すること。来るロータリー年度のために果敢な、しかし現実に即した会員増強目標を設定するようにクラブを指導すること。効果的な会員増強プログラムの構成要素を理解すること。

○ 効果的な奉仕プロジェクト

研修目的 効果的な奉仕プロジェクトの構成要素を理解すること。地域社会の真のニーズを取り上げるプロジェクトを実施する必要性を認識すること。地域社会のニーズの査定を行う方法を学ぶこと。四大奉仕のそれぞれの分野における奉仕活動の重要性を理解すること。

○ ロータリー財団

研修目的 ロータリー財団の主要プログラムと活動を理解すること。来る年度のために果敢な、しかし現実に即したロータリー財団寄付目標を設定するようにクラブを指導すること。

○ 資源—どこにあり、どのように使うか。

研修目的 責務を遂行するのに役立つ有用な方策資源に注意を向け、活用できるようにすること。利用可能な資源は、RI 委員会、タスク・フォースを始め、地域社会、地区、および RI 事務局に用意されている。ボランティア組織における認証の重要性を理解し、RI とロータリー財団を通じて用意されている認証プログラムに注意すること。

○ 年度計画

学習目的 「効果的なロータリークラブを計画するための指針」の使用方法を理解すること。帰宅後、クラブ会員と共にクラブ会長が最終化できるクラブの基本的な実施計画を作成すること。

23.030.4. 参加者

PETS への参加者としては、ガバナー・エレクト、ガバナー補佐、地区研修リーダー、地区内のクラブ会長エレクト全員が含まなければならない。クラブ会長エレクトの経費はクラブもしくは地区が負担することが奨励される。ガバナー補佐は、ガバナーを補佐して、自分たちが担当するクラブの次期会長が PETS に出席することを推進し、クラブ会長エレクト、ガバナー・エレクト、ガバナー補佐との間で、チームの団結を図るものとする。地区研修リーダーは、PETS

セミナー指導者チームのための研修資料を開発して、ガバナー・エレクトと共に研修セッションを行う。

23.030.5. PETS 指導者

ガバナー・エレクトが PETS に対し責任をもつものとする。地区研修リーダーは、ガバナー・エレクトの指示と監督の下に、セミナーの計画と実施に責任を持つ。セミナーの指導チームは、資格の備わったパスト・ガバナーと地区委員会委員長で構成される。ガバナー・エレクトは適切なセッションにおいてロータリー財団に関する話題を提供して、地区ロータリー財団委員会の援助をすることが奨励されている。

23.030.6. 時期

PETS は 3 月中に 1 日半のセミナーを開くものとする。

23.030.7. 多地区合同 PETS ガイドライン

多地区合同 PETS 組織は、ロータリー章典のセクション 16.010「多地区合同ガイドライン」から除外されており、多地区合同 PETS ガイドラインによって管理されている。多地区合同 PETS 組織は、これに関わったすべての地区が開発し承認した多地区合同 PETS ガイドラインに基づいて管理される。

○ プログラム

多地区合同 PETS を実施するガバナー・エレクトは、プログラムのうち少なくとも 3 時間を、ガバナー補佐を交えたガバナー・エレクトとクラブ会長エレクトの会合のために配分しなければならない。

○ 管理

ガバナー・エレクトは、最終的なプログラムを作成し承認する責任をもち、研修指導者と本会議の講演者を選定する。地区研修リーダー、またはガバナー・エレクトによって選ばれるか、承認された指名人は、セミナーにおける研修の計画と実施に責任を持つ。ガバナー・エレクトは、多地区合同 PETS のために集められたすべての基金を管理するために存在する方針と手続を適切に行う責任をもつ。また、ガバナー・エレクトは多地区合同 PETS 会計の財務監査諸表を適切に行う責任をもつ。多地区合同 PETS への参加を終結しようとする参加地区は、地区内クラブの 2/3 の承認を得なければならない。ガバナー・エレクトは、終結日の 60 日以内に、その決定を事務総長と他地区のガバナー・エレクトに通知しなければならない。

○ 奨励

多地区合同 PETS 組織は、単独地区 PETS の意思決定者が、多地区合同 PETS に出席するように招待することを奨励している。

○ 多地区合同方式への変更

多地区合同 PETS は、多くの地区が一堂に会する PETS の運営を知り、多地区合同 PETS に参加することによって、示唆に富み、やる気を起こさせる講演を聞くという利益を得ることができるように、多地区合同 PETS の食事会に参加するように、単独地区 PETS を招待することを奨励している。単独地区 PETS の代表は、RI や多地区合同 PETS に費用を支払うことなく出席することが奨励されている。ガバナー・エレクトは、地区内クラブの 2/3 の承認を得た後に、多地区合同 PETS を行うことができる。ガ

バナーは、あらかじめ理事会を代表して行動する事務総長の承認を得た上で、多地区合同 PETS を行うことができる。

23.030.8 PETS の管理

多地区、単独地区に関わらずすべての PETS は、同一の考え方を持ったガバナーと連携したガバナー・エレクトの直接監督権とコントロールの下にあって、地区指導者チームとの協調を図らなければならない。

2005.1.13

地区協議会

地区協議会に関する取り決めに、ロータリーの規約に基づいてご紹介いたします。地区協議会実施に当たっては、次の事項に留意してください。

- ① 実施主体はガバナー・エレクトであり、ガバナーではありません。次期地区研修リーダーとよく相談して効果的なプログラムを策定の上、実施してください。
- ② 会長エレクトの参加が義務づけられており、バナー・エレクトからの免除を受けずに、地区協議会に出席しなかったり、免除されても指定した代理が地区協議会に出席しなかった場合は、クラブ会長に就任することができません。
- ③ 会長エレクト研修セミナーPETSの後、4月または5月に、丸1日の日程で開催するように推奨されています。

国際ロータリー細則

15.020. 地区協議会

地区協議会は、多地区協議会でも可であるが、必要な技能、知識および意欲をもつロータリークラブの指導者を育成し、会員基盤を維持、および/または増強させ、それぞれの地域社会を始め他の国の地域社会のニーズを取り上げたプロジェクトを実施して成功させ、プログラムへの参加と資金寄付を通じてロータリー財団を支援するために、なるべく4月あるいは5月中に、毎年開催されるものとする。ガバナー・エレクトが地区協議会に対し責任を持つものとする。地区協議会は、ガバナー・エレクトの指示および監督の下に、ガバナー・エレクトが立案、実施するものとする。特別な事情があれば理事会は、ここに定める時期以外の時期に地区協議会を開催することを認可できる。地区協議会に出席を要請されるのは、クラブ会

長エレクトと次年度において重要な指導者の役割を務めるよう会長エレクトにより指名されたクラブの会員である。

標準ロータリークラブ定款

第9条 理事および役員

第5節 役員選挙

(c) 資格条件。各役員および各理事は、いずれも、本クラブの瑕疵なき会員でなければならない。会長エレクトは、ガバナー・エレクトから特に免除されない限り、会長エレクト研修セミナーと地区協議会に必ず出席しなければならない。免除された場合は、所属クラブによって指名された代理を必ず派遣しなければならない。この代理人は会長エレクト本人に対し結果報告するものとする。会長エレクトが、ガバナー・エレクトからの免除を受けずに、会長エレクト研修セミナーおよび地区協議会に出席しない場合、あるいは、免除されても指定の代理をこれらの会合に派遣しなかった場合、かかる会長エレクトはクラブ会長に就任できないものとする。

ロータリー章典

23.020. 地区協議会

23.020.1. 目的

地区協議会の目的は、ロータリークラブの指導者たちが、次のような点において必要な能力を育成し、知識を持ち、やる気を起こすように図ることである。会員基盤を維持し、増強し、地元地域社会および他の国の地域社会のニーズを取り上げたプロジェクトを実施して成功させ、プログラムへの参加と資金寄付を通じてロータリー財団を支援することである。

3.020.2. 参加者

地区協議会参加者は、クラブ会長エレクトおよび、次ロータリー年度に指導的役割を果たすようクラブ会長エレクトから任命されたロータリークラブ会員とする。

23.020.3. 構成

地区協議会においては、研修に参加する各分野別のグループとして次のような構成をとるものとする。

- 役割と責務
- 基本原則一方針と手順
- チームの選定と研修
- 活動計画の立案
- 資料
- 成功例の検討
- 実用的な応用: 計画を立てる
- 問題解決

23.020.4. 地区協議会研修目的

RI 理事会は地区協議会の学習目的として次のような点を挙げている。前述の地区協議会の目的を達成するために、各構成事項の研修目的は、研修に参加している各分野別のグループのニーズに基づいたものでなければならない。

- 会員勧誘と入会式

研修目的・・・クラブが所在する地域にふさわしく実行可能な会員勧誘計画を立て、実施する。クラブ会員に効果的な勧誘方法を習得させる方法を学ぶ。新会員をクラブに歓迎する入会式を行う方法を学ぶ。以上の責務を遂行するにあたり、役立つ資料や援助源を RI から入手する方法を知る。

- 新会員のオリエンテーションと指導顧問

研修目的・新会員がクラブに溶け込み、クラブ活動に円滑に参加できるように、新会員のためのオリエンテーションを計画、実施する。各新会員のための指導顧問を養成、任命する方法を学ぶ。以上の責務を遂行するにあたり、役立つ資料や援助源を RI から入手する方法を知る。

○ クラブ広報

研修目的 ロータリーとその奉仕活動に対する地域社会の認識を高め、クラブの会員勧誘策を支えるため、クラブの広報計画を立て、実施する。以上の責務を遂行するにあたり、役立つ資料や援助源を RI から入手する方法を知る。

○ クラブの管理

研修目的 ロータリークラブの管理運営に必要とされる任務(会費徴収、出席記録の管理、毎週のクラブ・プログラムの計画、親睦活動の手配など)を理解し、遂行する。

ある地域から他に地域へ移転するロータリアンについて、効果的に他クラブへ通知する方法を開発する。以上の責務を遂行するにあたり、役立つ資料や援助源を RI から入手する方法を知る。

○ 奉仕プロジェクトの成功

研修目的 成功する奉仕プロジェクトの特質を理解する。成功する奉仕プロジェクトの4つの要素(ニーズ調査、計画、実施、評価)を計画、実施する。ロータリー年度の枠を超えた継続的な奉仕プロジェクトを実施することの重要性を理解する。それぞれの奉仕部門において奉仕プロジェクトを実施することの重要性を理解する。以上の責務を遂行するにあたり、役立つ資料や援助源を RI から入手する方法を知る。

○ 地域社会奉仕プロジェクトのためのクラブの資金調達活動

研修目的 成功する資金調達プロジェクトの特質を理解する。クラブの資金調達活動を計画、実施する。資金調達活動を継続的に実施することの重

要性を理解する。以上の責務を遂行するにあたり、役立つ資料や援助源を RI から入手する方法を知る。

○ ロータリー財団

研修目的 ロータリー財団プログラム、およびロータリアンやその他の人々がロータリー財団に寄付する方法を理解し、クラブに説明できるようにする。クラブの年次寄付目標を設定、支援、推進する。ロータリー財団への大口寄付を推進する。以上の責務を遂行するにあたり、役立つ資料や援助源を RI から入手する方法を知る。

○ クラブ会長の指導力確立

研修目的 クラブを効果的に率先するのに必要とされる技能(指導力、動機付けの技術、チーム作りの方法、話し方、広報、問題解決など)を会得し、磨く。

23.020.5. 地区協議会の時期

地区協議会は、4月もしくは5月中に、丸1日を使って行う計画とする。

23.020.6. 地区協議会指導者

地区協議会のプログラム全般の責任はガバナー・エレクトが負う。

地区研修リーダーが協議会の計画と実施に責任を負う。各分野に関連する地区委員長は、担当する研修セッションの立ち上がりを指導する責任を負う。会長エレクトのための研修セッションには、パスト・ガバナー、ガバナー補佐などを適宜招くべきである。

23.020.7. 出席 a)

次期会長およびクラブ会長エレクトから次ロータリー年度に指導的役割を果たすよう任命されたロータリークラブ会員は、各自の所属するクラブに対して、地区協議会に出席すると誓約することを必要とする。

b)各クラブは、次期クラブ会長が地区協議会に出席することを義務付けると取り決めるように推奨される。この方針については、クラブ会長エレクト

トの選挙に先立ち候補者に知らせることとし、各クラブは、次期会長と次期幹事が地区協議会に出席する経費を支払うという方針を採択するものとするが、このことは他の指定を受けた参加者の地区協議会の重要性を低めるものではない。

23.020.8. 地区協議会の日程

事情によって、もし地区大会が4月もしくは5月に開催されるならば、地区協議会と地区大会を連続した会合日程で開催する。但し、そのような日程において、地区大会は後半に行われるものとする。そのような連続会合は、各会合に定められている時間数を減らすことなく、また各会合の必須事項に配慮をして行わなければならない。

2005.1.18

2004 年手続要覧

2月に入って、やっと待望の2004年版手続要覧が送られてきました。規約改定があったのは2004年6月18日に終了した2004年規定審議会です。日本語版として入手するまでに、7ヶ月半かかったこととなります。いつものことながら、RIのウェブサイトを通じて英語版が発表されたのはかなり以前のことで、英語以外の言語を母国語とする会員はかなりのハンディがあることとなります。RIに対して同額の人頭分担金を払っているのに、情報伝達が何ヶ月も遅れるのは、不公平極まりないと思いますが、皆さまはどのようにお考えですか。

今回は2001年版の手続要覧と対比して、どの部分がどのように改訂されたについて解説を試みてみたいと思います。

☆ 全体のレイアウトが変更され、前回までの2段組が1段組になりました。中心のスペースがなくなったせいもあって、約30ページ薄くなりました。個人的には見やすくなったような気がします。

☆ 全般的に内容が簡潔に改訂されました。

第1部 管理

☆ 第1章 ロータリークラブ

- **クラブ管理**・「試験的プロジェクト参加クラブ」1年間延長されたパイロット・プロジェクト・クラブとE-クラブについて述べられています。
- 「効果的なロータリークラブの定義」が新設されました。これはクラブ・リーダーシップ・プランの基本となるものです。
- 出席・全面的に簡潔に改定されました。新たに「兵役」が新設されましたが、これはイラクやアフガニスタンの戦争が影響したものと思われる。

- 営利化と配布・・・「会員情報」が新設され、これには、規定審議会で採択されたロータリアンの名簿の管理が含まれています。
- 親睦・・・「名を呼び合う習慣」ニックネームで呼ぶ習慣の項目が抹消されました。大阪大会の際、日本にはニックネームで呼ぶ習慣はないことを強調して、名札にはニックネームを書かないことになりましたが、ひょっとしたら、その影響かも知れません。
- 「新クラブ」の項目が新設され、「創立会員の最低人数」が20名とすることが明記されました。
- 「職業分類」「仮クラブ結成の要件」が新設されました。
- 名称と所在地域・・・「既存ロータリークラブの合併」が新設されました。

RI 細則 2.050

- 雑則・・・「ロータリー地域雑誌の定義」が新設されました。

☆ 第2章 地区

- 従来は「ガバナー」の項目で一括して説明されていましたが、「ガバナー・ノミニー」「ガバナー」「ガバナー・エレクト」に分割されて、判りやすくなりました。
- 管理・・・「地区研修委員会」の項目が新設されました。
- 拡大・・・2004年規定審議会の決議案 04-45 でスポンサー・クラブの人数が25名から20名に変更されたのですが、この手続要覧にはそれが反映されておらず、従来通り25名と記載されています。
- 財務・・・規定審議会で採択された制定案に基づいて、「地区資金の管理」の報告義務の内容が具体的に提示されています。
- 会合・・・「地区会員増強セミナー」「地区ロータリー財団セミナー」の項目が新設されました。「地区大会」に関しては2004年規定審議会の決議案 04-196 で、「1日以上3日以内、6時間以上」に決定したのですが、この手続要覧には、地区大会の推奨事項として従来通り、2日以上3日以内

と記載されています。ただし、従来あった9時間以上という時間に関する制約は抹消されています。

☆ 第3章 国際ロータリー

- 出版物・「RI ウェブサイト」の内容が詳しいものに変更されています。

第2部 プログラム

- 「RI 会員増強・拡大賞プログラム」が新設されています。

☆ 第5章 職業奉仕・内容の変更はありません。

☆ 第6章 社会奉仕

- 「社会奉仕に関する1923年の声明」・「(1)

ロータリーは基本的には一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕—

[超我の奉仕]の哲学である。」と記載されています。1998年までの手続要覧には、この最後の部分には、「この哲学は奉仕— [超我の奉仕]の哲学であり、[最もよく奉仕する者、最も多く報いられる]という実践倫理の原理に基づくものである。」と記載されていましたが、2001年の規定審議会の決議案01-678に基づいて、RI理事会が第二モットーの使用停止をしたことに併せて、決議23-34から、[最もよく奉仕する者、最も多く報いられる]という実践倫理の原理に基づくものである。」という文章が削除されて、現在に至っているわけです。しかしながら、国際大会や規定審議会で正式に決定した決議を理事会の考えだけで変更することはできないはずで、この決議23-34の最後の部分に(26-6,36-15,51-9,66-49)という記載がありますが、これは何れもこの年度の国際大会の議を経て変更された番号を表したものであり、今回のように規定審議会の議を経ずに変更することは理事会の越権行為と言わざるをえません。

○ 家族月間の項目が新設されました。毎年 12 月

☆ 第 7 章 国際奉仕

○ ロータリー国際理解と平和賞の項目が新設されました。

☆ 第 8 章 新世代

○ 「青少年と接する際の行動規範」が新設されました。

○ 「インターアクト」「ローターアクト」「ライラ」「青少年交換」の説明内容が簡素化されました。

第 3 部 国際的会合

各項目が合理的に組み替えられました。

☆ 第 9 章 国際大会・・・内容の変更はありません。

☆ 第 10 章 規定審議会・・・内容の変更はありません。

☆ 第 11 章 国際協議会・・・項目が新設されました。内容の変更はありません。

☆ 第 12 章 ゾーン研究会・・・従来のロータリー研究会の名称が変更になりました。内容の変更はありません。

☆ 第 13 章 他の国際的会合・・・地域大会、会長主催会議、国際研究会

第 4 部 ロータリー財団

☆ 第 14 章 組織および目的・・・内容の変更はありません。

☆ 第 15 章 ロータリー財団のプログラム

○ 人道的補助金プログラムが「地区補助金」「個人向け補助金」「マッチング・グラント」に分類され、その内容が具体的に説明されています。

☆ 第 16 章 財務

○ 項目が整理されていますが、内容の変更はありません。

○ ベネファクター、大口寄付者の項目が新設されました。

第5部 ロータリーの標章

☆ 第17章 ロータリーの標章の使用と保護

- プロジェクト別のロータリーの標章のサンプルが表示されました。
- 印刷、インターネット、E-メールによる標章の使用基準が定められました。
- ロータリーの標語・・・「超我の奉仕 Service above self」と「最も良く奉仕する者、最も多く報いられる They profit most who serve best」になりました。第二モットーの邦訳は変わりませんが、He profits most who serves best が They profit most who serve best になりました。

第6部 会議運営手続規則

内容に変更はありません。

第7部 組織規定

☆ 国際ロータリー定款、国際ロータリー細則、標準ロータリークラブ定款・・・2004年規定審議会によって、かなりの部分に変更になりました。

第8部 その他の法的書類

☆ 推奨ロータリークラブ細則・・・2004年11月のRI理事会でクラブ・リーダーシップ・プランの採択が決定し、それに併せて、委員会構成を中心に、推奨クラブ細則が全面的に改正されましたが、この手続要覧に掲載されているものは、改正以前の古い細則です。

☆ ロータリー財団細則については変更はありません。

2005.2.18

Service above self 考

カール・ウィルヘルム・ステンハマーRI 会長エレクトは 2005-06 年度のテーマを「Service above self 超我の奉仕」と発表しました。

何故、この言葉をテーマとして採用したかという説明の中で「1911 年、ロータリアンは Service above self という標語を熱意を持って採択しました。それはこの標語が、生まれたばかりの組織が発展の途上にある中、その理想を巧みに言い表していたからです。それから 95 年間、この標語は、私たちが人道的奉仕を遂行し、高い道徳的水準を推進し、国際理解と平和のために活動する上で、根底をなす動機となってきました。私たちの生活に内在するあらゆる事象と同じように、この標語を私たちは自然に受け入れることができます。」と述べています。

まず最初にはっきりしておかなければならないことは、「1911 年に採択された Service above self」という部分です。

1911 年に発表されたのは Service, not self であって、Service above self ではありませんし、その言葉が 1911 年に採択されたという事実もありません。Service, not self と Service above self との混同はいささかお粗末としても、そのように間違っ理解されているのは、1966 年に出版された Oren Arnold の「Golden Strand」に次のような記述があり、それが広く信じられているからだと思われます。

ポートランドでは全国大会が開催されていた。ホストクラブは、すべての代議員に、愉快に自然に親しみたい観光客としてのスリルを味わってもらおうと、コロンビア川を遡る大きな船に乗れるように手配した。抜け目ない連合会会長から出された、大会の当日の全議事を船の上でやるように手配するという提案は、余りにも魅力的なものだった。皆は賛成してにやりと笑った。もしも、スピーチに穴があれば（大会の講演者がしばしば見

せた習慣)、いつでも、移りゆく風景のパノラマを楽しむことができるに違いない。

その日に講演者の一人が、ミネアポリス・クラブの弁護士であり会長のベンジャミン・フランク・コリンズ **B. Frank Collins** であった。彼の演説は命令調で个性的であり、うるわしき8月の朝のように力強い話しぶりだった。彼が話しを締めくくったとき、人々はただうっとりとして彼の演説に聞き入っていた。

ロータリークラブの組織では、為すべきことはただ一つであり、それは出発点を間違わないことである。自分自身のためにそこからメリットを引き出そうとしてロータリーに入る人たちは、選択を誤った人たちであって、ロータリーとはそんなものではない。ミネアポリス・クラブにより採用され、クラブ創立以来堅く守られてきた原則こそ、“**Service, not self**”である。

二度あることは三度であった。奉仕のテーマが、再び、短い言葉で宣言された。代議員たちは直ちに、その言葉に飛びついた。 実際、この演説は、アーサー・シェルドンの有名な宣言、“**He profits most serves best**”を最初に聞いてから、僅か数分以内になされたものであった。

しかし、このより短い叙述は、再びロータリアンの心を打ち、各クラブは両方のモットーを採用することを決定した。

・ ・ 中略 ・ ・

“**Service, not self**”

そう、何れにせよ、自己の存在を考えることが、まったく悪いわけではない。例えば、人間は自尊心を持つべきだし、自分自身を守らなければならない。もし自分自身が零落すれば、奉仕することなどできるわけではない。従って、“**Not Self**”が、何を意味しているかを理解することは、まったく難解である。自分自身を二の次にしておくのは良いとしても、それを完全に否定するのはどうかと思われた。

「よし、それなら“Service Above Self”にしたらどうだろうか？」

誰かが意気揚々と、適切な提案をした。

「それは良いね！」

別の人が叫んだ。たぶんそれは、販売の専門家アーサー・シェルドンの興奮した声であったのかも知れない。

「それはよい方針であり、すべてを言い尽くしている。」

明らかに、彼の発言は正しく、その提案は満場一致をもって採択された。そこで、数カ月後には、“Service Above Self”は多くのロータリーのレターヘッドやパンフレットや演説原稿や宣言文に用いられはじめた。更にしばしば、モットーは“Service Above Self”と“He Profits Most Who Serves Best”が組み合わされて印刷された。

1911年のポートランド大会議事録には、大会最終日に欠席役員や会員から寄せられた多くのメッセージが読み上げられ、その中に Business Method 委員長のアーサー・フレデリック・シェルドンが用意した演説原稿をチェスレー・ペリー事務総長が代読しますが、その内容が参加者に極めて強い心象を与えたので、大会議事録にその全文が印刷され、He profits most who serves best がモットーとして採択されたと記載されています。

しかし、この大会議事録のどこを探しても、Service, not self がモットーとして採択されたという記載はなく、単に、「船上でミネアポリス・クラブ会長のベンジャミン・フランクリン・コリンズが、ミネアポリス・クラブの運営方針に関する短い演説を行った」とのみ記載されています。なお議事録には、そのスピーチ原稿は収録されておらず、Service, not self という言葉も、それが採択されたということも記載されていません。

すなわち、1911年のポートランド大会で、ロータリー・モットーとして He profits most who serves best と Service, not self の双方が採択されたというのは間違いであり、採択されたのは He profits most who serves best だけです。

船上におけるフランク・コリンズのスピーチ原稿は、How it is done in Minneapolis というタイトルがつけられており、National Rotarian の1911年11月号に掲載されています。フランク・コリンズがどういう意図から、Service, not self という言葉を述べたのかを知るために、少し長くなりますが、その全文をご紹介します。

ミネアポリスではどのようにしたか

会長および会員諸君。

昨日の午後、シアトル・ロータリークラブのピンカム氏が私のそばに座り、私たちは、ロータリーについて語り合いました。私は、会員に利益をもたらし、ロータリーを魅力的にするために、ミネアポリスで私たちがしたことの概要を少しばかり披露しました。

彼は、「この線に添った短い話なら、多分、ここにいる他の代表議員の人たちにも了解してもらえるかもしれません。」と言いました。ハリス会長はその発言を採り入れて、私たちが、ミネアポリスで考えだして努力した方針の概略について述べるために、私の発言時間を延長すると言いました。

(コリンズ氏は、盛大な拍手によって、中央の演台にあがるように要請されました。)

ミネアポリス・ロータリークラブは、1年前の昨年1月、ハリス氏とシカゴ・クラブの10名の会員によって組織が作られました。私たちは、チャーター・メンバーの公正なリストの下に、毎月一回、例会を開催するという考えの下で出発しました。

毎月一回の例会では、私たちが望んでいるようには、会員の関心を保ち続けられないことが、この勝負の極めて早い段階で明らかになりました。そこで、会長は昼食を採りながらこの問題を入念に調べるために、理事会を開いて、全ての主だった委員会の委員長を招待しました。この問題は徹底的に議論されて、クラブを良くするために、毎週規則的に昼食会を開催すべきであることが決められました。

当時は、7月と8月には例会を開催しない方がいいと考えていましたが、その時期がやってくると、例会に対する関心が高まってきました。出席についても、7月と8月も例会を続けた方が得策であるという考え方が、強くなってきて、それ以来、私たちは必ず金曜日に例会を開くということを守ってきました。

ロータリークラブの組織では、なすべきことはただ一つであり、それを正しく始めなければなりません。正しく始めるためには、ただ一つの方法しかありません。

自らの利益が得られるかもしれないと思ってロータリーに入ってくる人たちは、間違った部類の人たちです。それはロータリーではありません。ミネアポリス・クラブによって採用され、当初から定着している原則は、「Service, not self」です。

私たちはクラブの会員自らによる例会運営で成功を収めていたので、関心を得るために、外部からのタレントを招く必要は一切ありませんでした。入会を促すための慣例的な事柄として行った一・二の例外こそあったものの、私たちの例会は、厳密に、ビジネス・ラインに沿ったものでした。

どのようにすれば結果が引き出せるかという問題については、理事会や種々の委員会の委員長が慎重に検討し、みんなが完璧な友人関係を作り上げなければならないという前提で決定されました。

友愛委員会はこの問題を担当して、クラブのすべての会員を完全な友人関係にするために、その方針に沿ったアイデアを開発して、それを最高の喜びを持たせる方法で成し遂げました。

私たちは金曜日ごとに昼食例会を開催しましたが、一部の会員が、来週の昼食会のチケット販売係として、前の週に委員長によって任命されました。チケットはその人の事業所で販売されるので、クラブのすべての会員は、彼の事業所に行くことが重要な義務となり、そこで彼からチケットを買うことによって、その人やその人の事業を知ることができます。現在、これは、友人関係を緊密にするために私たちが用いている、最も喜ばしい方法の一つになっています。

最初、それが提案された時は、いくらかの反対がありました。

皆は言いました。

「私たちには時間がありません。

昼食会に行くために、1時間半かかります。さらに、まわり道をして切符を買うためには、余分な時間がかかってしまうでしょう。」

従って、皆が喜んで受け入れるものではありませんでした。提案は、このような方法で彼らに知らされていませんでした。

「もしあなたが、このクラブの方針である **"Service, not self"**に従って行動しているならば、あなた方は、彼の事業所に行く義務があります。」

そして、それ以来、私たちは全く何の苦勞もしていません。昼食会に出席する会員の 90 パーセントは、その人の事業所に行って、そこでチケットを買い、そこでしばしば、事業上の手腕を発揮します。

少なくとも彼らは、商品を見て、事業所を見て、それを通じて友人となり、心の中に深く刻み込まれれば、ロータリーの枝葉が何であるかが判るのです。

会員が私たちのクラブの会員に選ばれた時には、右側の席に司会役によって招かれます。そして、例会の適切な時間帯に、起立を求められて、司会役によってクラブに披露され、名前や彼が関与する会社が紹介され、自分の事業についてクラブに簡単に説明するために、2分間が与えられます。

その例会が終わるとき、または休憩に入る前には、友愛委員会の委員長が、多分、彼らを連れてみんなの前に現れて、クラブの出口のドアに案内するでしょう。例会が休憩に入ると、友愛委員会の委員長はそこに立って、新入会員とすべての会員の双方を正式に紹介します。彼らは握手をし、話をし、友人になります。それは、一人前の会員として自立するまで、新入会員を私たちのクラブと結びつけておくために、現実的に役立っているのです。

友愛委員会が行った別な活動は、クラブの様々な会員から供給されたメニューに従って、クラブのディナーを手配することでした。そらまめの献立が届けられ、会員の事業所から寄せられる全てのもの、すなわち、ロータリーに入っている肉屋からきたロースト・ビーフ、メニューに載せられている会社の名前などが書き込まれた会社に備え付けのメモにはうんざりさせられたことでしょう。

スープからのデザートまでのすべての品物は、クラブの会員から提供され、食事のメニューが発表されます。

それは、今まで私たちが開催したうちで、最も成功した会合の一つであり、全体の会員の5-6パーセントしか欠席しなかったものと思われます。

私たちは、メーカーや卸売業者やクラブ全体が、昼食会や社交的な夜の会合のために、彼らの事業所に招待されたクラブの会員のおかげで、数多くの夜の催しを行ってきましたが、これは、これまで私たちのクラブによって開かれた、夜間の会合の唯一の例です。

私たちは毎週例会を開いていますが、夜間例会を開く機会を持ったことは一度もありません。

現在、私は果物の卸売業をしています。クラブの会員になるために、私の友人のスレッシュャーシにあった時に、私はこう言いました。「これはすばらしい仲間の集いではありますが、私にとってどのような利益をもたらす考え方なのかが判りません。しかし、これに参加することはうれしいことです。」

そして、私は入会しました。ミネアポリスの通りで何十回も会ったことがあり、話し掛けるほど知っている人たちのように、知り合いになって、顔をつき合わせてあなた方と話をしたいと思っていましたが、彼らを知る以上に、ロータリーであなた方を知ることができました。そのことは、これまで私の人生で手に入れた最高の物の一つであり、今日の私の事業における最大の財産の一つでもあります。

その後まもなく、私たちはある計画をたてました。当然のことながら、私たちのクラブには、中心的に事業を営み、クラブの会員の上得意である一人の食料品商がいましたが、同時に、一軒の食料品店だけを上得意にすることは、クラブの全会員にとっては絶対的に不可能なことでした。

何故ならば、あなた方の近所に食料品店があると、必要なものがすぐ手に入って便利だからです。

ある日、私の息子が私のところに来て、言いました。

「お父さん。今日、或る食料品商がきて、私たちと取引するようにロータリーの会員に勧められたという話をしました。」

私はその会員に電話して、言いました。

「顧客を私に送ってくれたことに対して、とても感謝しています。」

彼は答えました。

「何が起こったかについて、あなたにお話ししましょう。」

私はちょうどお金を持ちあわせていたので、請求書の支払いをしました。長い間の中で初めてのことでした。食料品商は、お金を貰ったことを大変喜んで、私が望んだことを何でもしますと言ったので、私は、彼にあなたのところに行って、あなたと取引をするように話したのです。」

この時以来、私は、その人との取引が増えることを喜んでいます。もし私がそうしなかったら、それは私自身の誤りであり、そうする機会が私に与えられたのです。

もし品質や値段やサービスの点で、その人との取引が成立しなくても、その人を私のところに回してくれたロータリアンの過ちではありません。今や、近所にある別の食料品商が私を訪れて、私に話をもちかけるといったことが何度となく起こっています。

「或る人があなたのことを話して、あなたのところに行って、あなたに会いなさいと言いました。」

178人の組織のことを理解するようにあなた方に話し掛けるよりも、彼らの一人一人が、それを実行する機会があるときに、私のことを宣伝してもらう方がよっぽどいいということ、あなた方に話しておきたいと思えます。

私たちは、ミネアポリスにおいて、ミネアポリスを後援するための、全てのクラブの中で最大の会員数を擁するパブリシティ・クラブを持っています。事実上、みんながそれに入っており、ロータリアンの99パーセントは入っています。

数週前、ロータリー・クラブのある会員が、パブリシティ・クラブの会長をゲストとして招待しました。彼はやってきて、礼儀正しく、私たちに話し掛けながら、会場の中で自由に振舞っているのを見てうれしく感じました。

彼は言いました。

「皆さん、私は、あなた方に告白することがあります。このロータリー・クラブが創立された時、私は創立会員として署名しました。しかし、私は、深く考えすぎたあまり、窮屈で非現実的なものに思えたのです。そこで、それには賛成するわけにはいかないと考えて、入会しませんでした。しかし、皆さん。創立以来、あなた方のクラブをずっと見守ってきて、今日、クラブがどんなものかが判り、あなた方のクラブは多くのことを実行するクラブであることを知りました。私が創立会員として署名をしながら、このクラブに入らなかったことは、私の人生における誤りであったと考えていることを、申し述べさせていただきます。」

私たちの会長は、創立総会の席上で、講演者の一人がロータリーを表明する原則について述べましたが、ロータリーの基本とは違った考え方であることを思い出しました。そして、今日のゲストは、候補者名簿に記載しておくので、その機会が訪れたときには、喜んでいつでも会員になってくださいと述べました。

私たちには、クラブから会員が退会したことを判断する規則があります。例会を三回欠席すると、原因の調査が徹底的に行われ、欠席者が理事会に呼び出されて、役員がその弁明が正当であるとみなさない限り、彼の名前は会員名簿から抹消されます。

私たちは、それを二回強行せざるを得ませんでした。共に、結果としてクラブのためになりました。

私たちは、喜んで参加し、会員になり、規則的に例会に出席できる人たちの候補者名簿を持っているのです。

私たちは一緒に例会にでることは難しいとしても、部屋のあちこちから、何人かの人が立ち上がって言います。

「彼が努力して私にしてくれたことに対して、感謝したいと思います。」

クラブが創立されて以来、「私はあなたのために、何々をしました。」と言った人のことを聞いたことはありません。

このことについては、私たちのクラブでは一度も触れられたことはありませんでしたが、何十人もの人たちが、彼らに紹介してもらった取引に対して、感謝をしているのです。

ほんの数週間前、不動産業者が言いました。

「皆さん、私と 8,000 ドルを超える金額の売買をした顧客を、或る人が私に紹介してくれたことを話しておきます。もし、このロータリーの会員がその顧客を紹介してくれなかったら、この取引が成功するめどは立たなかったでしょう。」

このような例は、ありふれたものです。

私たちは、私たちの昼食のすべての業務を完全に引き受けてくれるハウス委員会を持っています。私たちに昼食を提供する場所は、ラディソン・ホテルであり、それは疑いなく、わが国における最も素晴らしいホテルの一つです。ここにいる人すべては、アメリカ合衆国にある最も美しいホテルの一つで、私たちの例会が開催されていることを、確信していると、あなた方に言っておきたいのです。

私たちは全てのことをハウス委員会に任せています。彼らは完全に準備を整え、食物が運ばれて、私たちの前に置かれます。えり好みする必要はありませんし、無駄な時間を費やすこともありません。

私たちはこういった会員間の友愛の心を長所にしていきます。

話を終える前に、クラブで起こった最も喜ばしい一つの例を話しておきたいと思います。

会員になって半年に満たない人が、例会で立ち上がって言いました。

「皆さん、私は、この街にある、友愛を基盤とするすべての神秘的な組織に入っています。私はこれらの組織に何年もの間所属しています。そし

て、これらの組織に何年もいたからこそ、率直にあなた方に言えます。私があなた方のクラブの会員になった半年の間に、私が貸家業を通じて会った人よりも、より多くの人と心を通わせることができました。私は、妻に言いました。『もし私の身に何かが起こり、相談や援助やそのほかのことが必要ならば、ミネアポリス・ロータリークラブに行きなさい。』と。」

私たちのクラブを象徴する言葉こそ「Service, not self」です。（拍手。）

どのように解釈するかは、人様々でしょうが、このスピーチの内容を分析すれば、自己を犠牲にして他人に奉仕することを強いているとか、極めて宗教色の強い、次元の高いスピーチという評は当てはまらないのではないかと思います。むしろ、今までは会員同士でおこなっていた相互取引を、ロータリアン以外の人にも広げていこうという単純な内容とも理解できます。

ロータリーは、profits を適正にシェアすれば、結果として継続的な事業の発展が得られるというシェルドンの理論を採用したわけですが、profits が得られる具体的な事例を表に出さない限り、誰もロータリー運動に参画しなかった時代です。従って、同じ時期に発表されたコリンズのスローガンが、物質的相互扶助に関連していたとしても、至極当然なことだといえます。従って、この「Service, not self」は、元来、会員同士に限定されていた物質的相互扶助を、他の人たちにも開放しようという、現在の我々から見れば極めて当然なスローガンであったにもかかわらず、これを宗教的または人類愛に基づいた高次元のスローガンと誤解した後世の人たちが、「Service, not self」に「自己犠牲に基づく他人への奉仕」という間違っただけの解釈をつけたものと思われま

す。この「Service, not self」という言葉がロータリーの公式文献中に正式に登場するのは、1916年にサンフランシスコで開催された国際ロータリークラ

ブ連合会年次総会で、ガイ・ガンデカーが書いた「ロータリー通解」が全会員に配布され、この文献中にロータリー・スローガンとして「He profits most who serves best」と「Service, not self」のフレーズが引用されていることに困ります。

ガイ・ガンディカーはこの「ロータリー通解」の中で「He profits most who serves best」についてはかなり詳しい解説を試みていますが、

「Service, not self」については、そのフレーズを引用しているだけで、解説は加えていません。

いつごろの時代の人たちが、「Service, not self」に「自己犠牲に基づく他人への奉仕」という間違った解釈をつけたのかは判りません。その間違った解釈を信じた人たちが、「それでは困る、自己の存在を認めた上で、他人のために奉仕する」に変えてもらいたいということで、現在我々が慣れ親しんでいる全く別なスローガン「Service above self」を作り、それがロータリー・モットーとして、1950年のデトロイト大会で承認されたと考える方が自然ではないでしょうか。

1916年に、ガイ・ガンディカーは「Service, not self」という言葉を使っていますから、「Service above self」が生まれたのは、それ以降だと思われる。

「Service above self」というモットーは誰によって、何時作られたかについては不明です。

「He profits most who serves best」は、この文章の作者であるアーサー・フレデリック・シェルドンが4つの論文に、その詳しい解説を述べているので、その真意を理解することは可能です。「Service, not self」もフランク・コリンズの手稿を読めば、その真意が理解できます。しかし、

「Service above self」に関する限り、作者も年代も不明ですから、何を言わんとしているのかという真の意味は判りません。色々な人が色々な解説

を試みているのですが、それはあくまでもその人の考え方に過ぎません。本来の意味を裏付ける資料が見あたらないことは非常に残念なことです。

なお、このモットーはシェルドンの作だという人もいますが、これも、**Golden Strand** に書かれている以下の文章の影響を受けたものと思われるます。

「よし、それなら“**Service Above Self**”にしたらどうだろうか？」

誰かが意気揚々と、適切な提案をした。

「それは良いね！」

別の人が叫んだ。たぶんそれは、販売の専門家アーサー・シェルドンの興奮した声であったのかも知れない。

「アーサー・シェルドンの興奮した声であったのかも知れない。」と書かれてあるのであって、「アーサー・シェルドンである。」と書かれているわけではないのです。**National Rotarian** や初期の **The Rotarian**、大会議事録を片っ端から調べましたが、「**Service above self**」がシェルドンの作だと断定する資料は見当たりませんでした。

私はロータリーには二つのモットーがあり、一つは職業奉仕を表すモットー「**He profits most who serves best**」であり、もう一つは人道的奉仕活動を表す「**Service above self**」であると考えています。

今、次年度の国際ロータリーのテーマとして、「**Service above self**」が提示されたことは、取りも直さず職業奉仕の理念が衰退して、ボランティア活動に代表される人道的奉仕活動一辺倒に変貌するのではないかという危機感を抱いていますが、皆さまはどうお考えですか。

2005.2.26

ロータリー・モットーの変遷

○ 1910年8月

第1回全米ロータリークラブ年次大会(シカゴ)で、アーサー・フレデリック・シェルドン(シカゴ・クラブ)が、「He profits most who serves his fellows best」を発表するが、参加者からの反応は芳しくなかった。

○ 1911年8月

第2回全米ロータリークラブ連合会年次大会(ポートランド)で、アーサー・フレデリック・シェルドン(シカゴ・クラブ)が、「He profits most who serves best」を発表。全文が大会議事録として配布された報告書に印刷され、ロータリー宣言の結語として採択された。

この大会でロータリー・ターゲットとして採択されたと記載されている文献も多いようだが、それは間違いであり、この大会で採択された「ロータリー宣言」の結語として採択されたというのが正しい。

○ 1911年8月

第2回全米ロータリークラブ連合会年次大会(ポートランド)で、ベンジャミン・フランクリン・コリンズ(ミネアポリス・クラブ)が、ミネアポリス・クラブの運営方針として「Service, not self」を発表。これはエキスカッションとして行われたクルージングで単に発表したのみで、大会議事録には、この言葉に関する記録も、大会で採択されたという記録もない。

従って、この大会で、「He profits most who serves best」と「Service, not self」の双方がロータリー・ターゲットとして採択されたという記述は誤りである。

この演説の要旨は、①自らの利益を得る目的でロータリークラブに入会することは間違いである。②いろいろな機会を通じて、会員同士の取引の機会を広げていく必要がある。③会員同士の取引には限界があるので、今

後はその取引を会員外にも広げていく必要がある。ということであって、俗に言われているように、「自己を犠牲にして他人のために奉仕する」といった内容のものではない。

○ 1913年8月

第4回国際ロータリークラブ連合会年次大会(バッファロー)で、アーサー・シェルドンは「He profits most who serves best」に関する講演を行う。

○ 1915年7月

第6回国際ロータリークラブ連合会年次大会(サンフランシスコ)で、ガイ・ガンディカーのロータリー通解にロータリー・スローガンとして、「He profits most who serves best」と「Service, not self」が記載されている。従ってこの時点では、「Service, not self」が一般的に使用されていたものと思われる。しかし、このロータリー通解には「Service, not self」についての解説は記載されていないので、コリンズが述べた意味がそのまま伝えられているかどうかは不明である。

○ その後の変化

これ以降の何れかの時期に、「Service, not self」が「Service above self」に変化したものと思われる。誰が考え出した文章なのかも不明であり、一部にはアーサー・シェルドンだという説もあるが、それを裏付ける資料は見当たらない。

この文章に変えられた理由について、元来「Service, not self」は会員同士に限定されていた物質的相互扶助を、ロータリアン以外の人たちにも解放しようという、現在の我々から見れば至極当然なスローガンであったにもかかわらず、これを「自己を犠牲にして他人のために奉仕する」という極めて宗教的な高い次元の理念だと誤解した当時の人たちが、「自己の存在を認めた上で他人のために奉仕する」という意味から「Service above self」

を作ったものと思われる。しかし、何時の時期に作られたのか、如何なる意味が秘められているのかを示す文献は、現時点では発見されていない。

なお、このスローガンの文章の **not** から **above** への変更をコリンズが了解したか否かについても不詳である。

○ 1921年3月

The Rotarian 3月号に「ロータリーの建設者」というタイトルでコリンズの追悼記事が掲載されており、「今や世界で広く使われているロータリー・スローガン **Service above self** の作者」と記載されている。コリンズが **Service, not self** ではなく、**Service above self** の作者として紹介されているのは大きな驚きである。

○ 1921年6月

第12回国際ロータリークラブ連合会年次大会(エジンバラ)で、アーサー・シェルдонは **Rotary Philosophy** という演説を行い「**He profits most who serves best**」に関する詳細な説明を行う。

○ 1950年6月

第41回国際ロータリー年次大会(デトロイト)で、決議 50-11 「**He profits most who serves best**」と「**Service above self**」をロータリー・モットーとして定めることを提案する件(オハイオ州、コロンバス・ロータリークラブ提案)が修正採択された。

その決議文は次の通りである。

「**He profits most who serves best**」と「**Service above self**」は40年間に亘って、ロータリーの基本的な奉仕の理想を効果的に表現するモットーとして、一貫して、広く、国際ロータリーは自然に使ってきた。そして、これらの言葉は、ロータリーの原則と目的の一部として、永遠に一般大衆やロータリアンの心の中に留まり、使い続けられている。ロータリーは、常に、職業奉仕の目的となる基本的な真理は、その利益が物質的な報酬か

精神的な健全性や満足感か否かに関わらず、奉仕こそが利益を得る基本であると教えてきた。事実上 40 年間に亘って、これらの言葉はモットーとして使われてきたのにも関わらず、今まで国際ロータリーによってモットーとして採用されたことはない。第 41 回年次大会の議を経て、国際ロータリーは「He profits most who serves best」と「Service above self」がロータリー文献や他の場所で使うことができるロータリー・モットーとして採用することを決議する。

○ 1976 年 2 月

The Rotarian 2 月号にアーサー・シェルドンの「He profits most who serves best」に関する解説が掲載されている。

○ 1977 年 2 月

The Rotarian 2 月号に「Service above self を我々に提供したフランク・コリンズ」という記事が掲載されている。その内容は彼のスピーチ原稿に基づいた解説と初期のミネアポリス・クラブの例会風景の紹介および、1950 年のデトロイト大会において「He profits most who serves best」と「Service above self」がロータリー・モットーとして採択された経緯が記載されている。

○ 1989 年 2 月

1989 年 2 月に開催された規定審議会において、決議案 89-145 「Service above self という標語を国際ロータリーの第一標語に定める件」が採択された。本提案は Service above self を第一標語として指定しようというものであるが、He profits most who serves best も引き続きロータリーとクラブの公式標語として残すものである。

○ 2001 年 7 月

2001 年 7 月に開催された RI 理事会において「第二モットー He profits most who serves best を使用停止にする」ことが決定された。これは 2001

年規定審議会に提案された「01-678 すべてのロータリー用語から性に関する表現を削除することを理事会に要請する件」が採択されたことを受けて RI 理事会が取った措置であり、同時に決議 23-34 の文面からも **He profits most who serves best** の文章が抹消されるという事態になった。

規定審議会の決定は、性に関する表現を削除することであって、モットーそのものを使用停止にすることではないという日本人ロータリアンの抗議に、11 月に開催された RI 理事会は急遽この決定を撤回した。

○ 2004 年 6 月

2004 年 6 月に開催された規定審議会において **He profits most who serves best** の廃止が提案されたが、否決された。しかし **He** が使われていることに対する反発が強く、このモットーは **They profit most who serve best** に変更された。なお、「歴史的に重要な文書や声明は原文を尊重する」という日本からの提案が採択されたことによって、**He profits most who serves best** が原文のまま残ることになったが、2004 年 11 月に開催された RI 理事会はその提案に従わないことを決定した。

○ 2005 年 2 月

国際協議会においてステンハマー RI 会長エレクトは、2005-06 年度国際ロータリーのテーマとして **Service above self** を発表した。ただし、このテーマそのものの解説は行われていない。

ステンハマー RI 会長エレクトは、「ロータリー・テーマ資料」の中で、「1911 年、ロータリーは **Service above self** という標語を熱意を持って採択しました。それは、この標語が、生まれたばかりの組織が発展の途上にある中、その理想を巧みに言い表しているからです。それから 95 年間、この標語は、私たちが人道的奉仕を遂行し、高い道徳的水準を推進し、国際理解と平和のために活動する上で、根底をなす動機となってきました。

来る年度、すべてのロータリアンに **Service above self** の真の意味をじっくり考えていただく機会が与えられます。」と述べている。

しかし 1911 年にフランク・コリンズが述べた言葉が標語として採択されたという事実はないし、フランク・コリンズが述べた言葉は **Service, not self** であって **Service above self** ではない。またフランク・コリンズが **Service, not self** を述べた真意は、人道的奉仕を遂行し、高い道徳的水準を推進し、国際理解と平和のために活動する上で、根底をなす動機ではないことは、彼のスピーチ原稿を熟読すれば一目瞭然である。

ステンハマーRI 会長エレクトが述べた **Service above self** の真意を是非知りたいものである。

2005.3.14

四つのテストの解釈

四つのテストが作られた経緯やその内容については、すでに数多くのロータリアンが紹介していますし、私のウェブサイトでも「炉辺談話」や「職業奉仕」に記載していますので、今回は、どのように解釈すべきかについて考えてみたいと思います。現行の「四つのテスト」は、東京クラブの本田親男氏の翻訳によるもので、1954年以來、日本人ロータリアンが座右の銘として親しんだ名訳ですが、その一方で、ハーバート・テラーがこのフレーズを作った意図が完全に翻訳に反映されているか否かについて、疑義を抱いている人も多いようです。そこで今回は、この四つのテストの邦訳について問題提起をしてみたいと思います。

まず最初に考えなければならないことは、この四つのテストは、決して事業の倫理基準や商道徳を高めることを目的に作られたものではなく、倒産の危機に瀕していた調理器具メーカーを再建させるために作られた、極めて現実的な基準だということです。すなわち四つのテストというのは、商取引をする当事者同士が納得づくで取引できる基準を示したもので、社会で一般的に適用するとは限りません。

よく、癌の告知や死期の告知に四つのテストを適用すべきか否かとか、醜い女性に、正直に醜いと告げるべきか否かと言った議論をする人がいますが、四つのテストはあくまでも商取引にのみ適応するように作られた基準であることを忘れてはなりません。商取引はシビアなものですから、それを厳密に判定する基準が必要ですが、一般の生活に夢や希望を与えるためにつくささやかな嘘は、人生の潤滑油として必要不可欠なものなのです。

Four-way test 四つのテスト

「事業を繁栄に導くための四通りの基準」ならば、当然 **Four-way tests** と複数形になるはずですが、これが単数形であるのは、事業を繁栄に導くためには、四通りの基準を一つずつクリアーすればいいのではなく、四つ纏めたものを一つの基準として、そのすべてをクリアーしなければならないことを意味します。

ロータリーの綱領が **Object of Rotary** と単数形であり、四つの項目が渾然一体となって、一つの綱領を形作っているのと同様です。

Is it the truth? 真実かどうか

「嘘偽りがないかどうか」という意味です。商取引において、商品の品質、納期、契約条件などに嘘偽りがないかどうかは、非常に大切な基準です。真実というのは、「80%の真実」という言葉が示すように、人間の心を通じたアナログ的な判定であるのに対して、事実とはその事実があったのか、無かったのかの二者択一を迫るデジタル的判定ですから、ここでは「事実」という言葉を用いるべきでしょう。

Is it fair to all concerned? みんなに公平か

fair と **all concerned** という言葉の翻訳に問題があります。**fair** は公平ではなく公正と訳すべきでしょう。公平とは平等分配を意味するので、例え贈収賄で得た **unfair** 不正なお金でも平等に分ければ、それでよいことになります。

all concerned は **all** だけが訳されており、肝心の **concerned** が省略されています。冒頭に述べたように四つのテストは「商取引」の基準として定めた文章ですから、この **concerned**（関わりのある人、関係する人）は「取引先」のことを意味することは明白です。従ってこのフレーズは「すべての取引先に対して公正かどうか」ということを意味します。

Will it build goodwill and better friendship ? 好意と友情を深めるか

goodwill は単なる好意とか善意を表す言葉ではなく、商売上の信用とか評判を表すと共に、店ののれんや取引先を表します。すなわち、その商取引が店の信用を高めると同時に、よりよい人間関係を築き上げて、取引先を増やすかどうかを問うものです。

Will it be beneficial to all concerned ? みんなのためになるかどうか

Benefit は「儲け」そのものを表す言葉です。商取引において適正な利潤を追求することは当然なことであり、決して恥ずべきことではありません。ただし、売り手だけが儲かった、また買い手だけが儲かったのでは公正な取引とは言えません。その商取引によって、すべての取引先が適正な利潤を得るかどうかの問題なのです。

2005.4.2

カーネル・サンダース

全世界の主要な都市に必ずと言っていいほどあるケンタッキー・フライド・チキンの店頭では、夏冬通じて白いモーニングを着て、眼鏡をかけた、でっぷり太った白髪のカーネル・サンダースが客を迎えてくれます。この眼鏡は本物の度入りの老眼鏡なので、眼鏡を忘れた人には便利らしく、無断で拝借する人が後を絶たないそうです。

1985年の阪神優勝にまつわるカーネル・サンダースの呪いの話は有名です。優勝に熱狂した余り、阪神ファンがバースに良く似たカーネル人形を胴上げして、道頓堀川に落としてしまいました。いつものごとき熱狂阪神ファンの暴挙ですが、川へ投げ捨てられたカーネル人形の呪いが、阪神にふりかかって、それ以来最下位の常連となり、実に二十年近くの間、優勝から遠ざかることになったという話です。

彼にフリーメーソンの烙印を押す人も多く、その証拠に、このカーネル人形の左の襟に、フリーメーソンのバッジが着いていると言うのですが、目を凝らして良く見ると、それはフリーメーソンのバッジではなく、紛れもないロータリーのエンブレムなのです。そうです。彼はれっきとしたロータリアンなのです。

ハーランド・サンダース Harland Sanders は1890年9月9日にインディアナ州南部のヘンリービルで生まれました。6歳の時に父親が亡くなり、母親が工場に働きにでたため、3歳の弟と生まれたばかりの妹の面倒をみななければなりません。母親の代わりに三度の食事の支度をしたために料理の腕前をあげたことが、後の彼の運命に重要な影響を与えることになったのです。6歳の時に一人で見事なパンを焼き上げたことが、彼の少年時代の有名な逸話として残っています。

小学校に通いながら、10歳から近所の農場で働き始め、中学を中退した後、16歳の時に年齢を偽って軍隊に入りましたが、これが露見したため2ヶ月で除隊になります。その後サザン・パシフィック鉄道に入社して、修理工、ボイラー係、機関助手、保線係を務めましたが、19歳の時に解雇され、ノーフォーク&ウエスタン鉄道、ペンシルバニア鉄道と渡り歩いた後に、保険会社の外交員になります。

1912年22歳の時に、インディアナ州ジェファーソンビルに転居し、フェリーボートの経営に携わり、その後、アセチレンガスのランプ販売、タイヤのセールスを経て、1919年、29歳でケンタッキー州ニコラスビルでガソリン・スタンドを経営します。このガソリン・スタンドは徹底したサービスによって大いに繁盛して、やっと安定した生活を送ることができるようになりました。なお、1920年、29歳の時に、ジェファーソンビル・ロータリークラブのチャーターメンバーとして入会します。

1930年にケンタッキー州コービンにガソリン・スタンドを移転したサンダースは、コービン・ロータリークラブに移籍しました。「自動車には良質のガソリンが必要なと同じように、ドライバーにも良質な食事が必要である」と考えたサンダースは、ガソリン・スタンドに併設して6席の「サンダース・カフェ」を開店し、手製のフライド・チキンを出しますが、これが美味しいと大評判になって、長蛇の列ができるほど繁盛しました。そこでサンダースは、レストラン事業に専念するために、ガソリン・スタンドを売却して、道の反対側に142席の本格的なレストランを建設して、「ケンタッキー・フライド・チキン」の商標で、大々的なレストラン経営にのりだします。

1935年、ケンタッキー州知事から、おいしいフライド・チキンを提供した功績をたたえてカーネル Colonel 陸軍大佐の名誉称号を受けました。これが、カーネルというニックネームがついた由来です。

カーネルがビジネスの基本にしたのは、次の四つのルールだったと記載されています。

1. そのビジネスに嘘偽りはないか
2. そのビジネスは関係するすべての人に公正か
3. そのビジネスは良好な人間関係を作っていくものか
4. そのビジネスは関係するすべての人にとって有益なものか

すなわちカーネルは、ロータリーの四つのテストに照らしながら事業を営んでいたわけです。カーネルがロータリーに入会したのは、この四つのテストに魅せられたからだという記述がありますが、彼がロータリーに入会した 1920 年には、まだ四つのテストはできていませんので、この記述は明らかな間違いです。

1952 年、高速道路が完成して、コービンの道路事情が急変して、あまり自動車が来なくなったのを機会に、レストランの廃業を決めますが、フライド・チキンの製造方法を教えてフランチャイズ化する方法を思いつき、ユタ州のハーマーズ・カフェで第一号店の契約を取ることに成功し、その後 10 年間に全米の 600 のレストランと契約を結ぶことができました。

フランチャイズ事業の契約内容は、

② 清潔なレストランであること。

② 圧力釜の性能の差で味が変わるのを防ぐため、圧力釜とタイマーをセットしたものを 35 ドルで購入すること。

③ フライド・チキン一ピース当たり 4 セントのロイヤリティを支払うこと。

④ スパイスの中身は秘密にして調合済みのものをロイヤリティに含めて渡すことでした。

このフランチャイズ事業が評判になってテレビに出演依頼がきました。冬だというのに白いモーニングを着て出演したのが大うけして、これがそ

の後、カーネル人形として、ケンタッキー・フライド・チキンのトレード・マークとなりました。

1960年に、本拠地を交通の便のよいレイビスに移転し、同時にシェルビービル・ロータリークラブに移籍しました。1964年、74歳の時に、200万ドルでジョン・ブラウンに権利を売ってリタイアしましたが、その後ナビスコを経てペプシコーラに売却されたときの価格は8億4000万ドルとされています。

コーネルがフランチャイズの仕事で飛び回った距離は40万キロ、地球を10週する距離でした。四つのテストを実行して、二度のビジネスを成功させた偉大なロータリアン、カーネル・サンダースは1980年、90歳で白血病のため逝去しました。

2005.4.8

ロータリー奉仕理念の変遷

年度	内 容
1905.2	シカゴ・ロータリークラブが創立される
1906.2	「親睦」と「事業上の利益の増大」を謳った最初の定款が作られる
1906.12	定款に「シカゴ市の利益の推進」が加えられる 社会奉仕の概念が生まれる
1908.4	アーサ・フレデリック・シエルドンがシカゴ・クラブに入会して、職業奉仕の概念を提唱する
1910.8	第1回全米ロータリークラブ連合会年次大会(シカゴ)において、アーサ・フレデリック・シエルドンが「 He profits most who serves his fellows best 」を発表する
1911.8	第2回全米ロータリークラブ連合会年次大会(ポートランド)において、フランク・コリンズ(ミネアポリス・クラブ)が「 Service, not self 」に関するスピーチを行う。 同大会において、アーサ・フレデリック・シエルドンの「 He profits most who serves best 」のレポートが紹介され、「ロータリー宣言」の結語として採択される
1913.8	第4回全米ロータリークラブ連合会年次大会(バッファロー)において、ラッセル・グライナーの提案により、ロバート・ハント(シューシティー・クラブ)が「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」を作成することとなり、その後 J.R.パーキンスがその作業を引き継ぐ
1915.7	サンフランシスコ大会において、「全分野の職業人を対象とする

	ロータリー倫理訓」(道徳律)が採択される
1916	ガイ・ガンディカーが、「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」(道徳律)を収録した「A TAKING KNOWLEDGE OF ROTARY (「ロータリー通解」)」を出版する
1917	ロータリー財団が生まれる
1916ー 1921	「Service, not self」が「Service above self」に変化するが、誰によっていつ変えられたかは不明
1921.6	シエルドンがエジンバラ大会において、「The Philosophy of Rotary ロータリー哲学」を発表する 国際奉仕の概念が生まれる
1922	国際ロータリー・クラブ連合会が RI に改称される RI 細則第 16 条により「道徳律」が規範的効力を持つ
1923.6	セント・ルイス大会において、ウィル・メーニア・ジュニア(ナッシュビル RC)、ウィリアム・ウェストバーグ(シカゴ RC)の起草による決議 23-34 が採択される 「Service above self」がロータリーの奉仕哲学、「He profits most who serves best」が実践理論の原理と定義される
1927.6	ベルギーのオステンド大会において四大奉仕部門に分類される
1931	「道徳律」の頒布が禁止される
1932	ハーバート・テイラー (シカゴ RC) が、クラブ・アルミニウム会社の経営再建のために「四つのテスト」を作る
1943	RI 理事会は「四つのテスト」を正式採用する
1948	パーシー・ホジソンが職業奉仕の実践手引きとして、「Service is my business (奉仕こそわがつとめ)」を発行する
1950.6	デトロイト大会において、「Service above self」「He profits most

	「who serves best」が公式標語として採択される(50-11)
1951	「道徳律」が廃止される
1962	世界社会奉仕プログラムが開始される。人道的奉仕活動への転換
1978	3-H プログラムが開始される。RI 主導型大型プロジェクトの開始
1980	「道徳律」に関する RI 細則第 16 条が削除される (80-22)
1985	ポリオプラス・プログラムが開始される
1987	「職業奉仕に関する声明」を公表。クラブが実施する職業奉仕活動を巡る混乱
1989	「Service above self」を第一標語、「He profits most who serves best」が第二標語となる (89-145) 「ロータリアンの職業宣言」が採択される (89-148)
2001	「ロータリーの文書から性別限定語を削除する件」(01-678) の採択に伴って、RI 理事会は「He profits most who serves best」の使用を停止 日本からの異議によって、RI 理事会は使用停止を撤回
2004	「He profits most who serves best」が「They profit most who serve best」に変更される

2005.4.25

50年後の地球環境

今から 46 億年前、微惑星が衝突と合体を繰り返して地球が誕生しました。

一面を海に覆われていた地球に、大陸が隆起したのは 40 億年前であり、ほぼ同じ時期に海の中で生命体が誕生しました。単細胞のバクテリアから、魚になり、4 億年前には陸上の生物が生まれ、爬虫類、哺乳動物を経て霊長類に進化したのが 4500 万年前、人類の祖先が誕生したのは 400 万年前です。

生物の進化の過程を見ると、その種の中でもっとも強者であったものは必ず滅び、弱者が異なった環境に順応するように進化して生き延びて、最後に人間に到達したことが分かります。最も弱い種の魚が生き延びるために陸に上がって両棲類となり、巨大な爬虫類ではない哺乳動物、猛禽類ではない霊長類、さらに人類へと進化して行ったのです。

だとすれば、現在最も強者である人類が、未来永遠に強者であり続けることは、自然の摂理に反することになります。それを裏付けるかのように、人類が人口爆発によって絶滅の危機に瀕するのは 50 年後という、国連の予測統計がでています。

21 世紀の中ごろ、すなわち 50 年後の地球環境はどのようになっていくのでしょうか。

2005 年の地球の人口は 64 億 5100 万人と推定されています。2000 年に国連が発表した推定人口統計(表 1)によれば、2010 年には 68 億 2600 万人、2020 年には 75 億 6300 万人、2030 年には 82 億 600 万人、2040 年には 87 億 5900 万人、2050 年には 92 億 2400 万人になることが予測されています。地球が人間を養えるキャパシティーは約 80 億だと言われていますから、これをはるかに越すことになります。

もともと、1995年に発表された推定人口統計では、2050年には100億人を越すと言われていたのですが、アフリカにおけるエイズの蔓延のため、下方修正されたという経緯があります。

これに比して先進国人口はほとんど変わらず、約11億人から12億人の間で推移しますから、発展途上国、開発途上国ですさまじい勢いで人口爆発が起こることが(表1)からも判ります。地域別ではアフリカ、アジアの人口増加が著しく、比較的先進国の多いヨーロッパでは、逆に人口が減少する傾向が認められます。

表1 地域別推定人口 (2000年)

2000年	2010年	2020年	2030年	2040年	2050年
東アフリカ					
245,302,494	309,115,932	381,415,116	460,460,429	549,453,441	649,229,097
西アフリカ					
226,401,286	285,459,175	355,011,065	436,694,294	531,677,635	640,036,970
北アフリカ					
181,028,015	217,019,291	251,926,919	283,164,407	309,302,526	329,820,651
南アフリカ					
50,545,935	50,078,599	47,821,989	44,812,883	41,623,669	39,303,742
中央アフリカ					
93,320,699	120,734,087	153,117,477	190,760,373	232,990,508	278,978,000
東ヨーロッパ					
305,406,510	295,366,440	285,540,121	271,940,150	257,353,801	241,320,733
北ヨーロッパ					

95,198,984	97,702,544	100,073,761	101,417,149	101,013,873	99,641,873
南ヨーロッパ					
145,737,132	147,828,404	146,581,756	143,127,086	138,368,389	131,597,303
西ヨーロッパ					
183,624,015	187,530,788	188,634,735	187,404,209	183,491,192	177,447,317
東アジア					
1,496,304,241	1,581,910,681	1,664,585,585	1,689,750,977	1,672,562,380	1,628,553,303
中央アジア					
1,470,861,434	1,718,888,161	1,960,002,882	2,178,426,178	2,369,517,352	2,527,618,756
東南アジア					
532,005,996	608,587,896	676,410,773	732,895,138	774,103,307	799,034,900
西アジア					
187,432,689	226,433,285	265,354,643	303,016,504	339,555,758	371,973,935
カリブ諸国					
36,813,363	40,660,258	44,678,318	48,165,527	50,968,390	53,083,515
南アメリカ					
348,336,602	392,530,116	430,725,888	461,236,604	480,964,419	490,094,319
北アメリカ					
313,742,904	343,545,670	373,148,196	403,073,364	432,783,98	2461,639,190
中央アメリカ					
136,796,614	157,865,025	178,617,813	197,679,406	213,753,720	226,333,709
オーストラリア・ニュージーランド					
22,984,382	25,153,405	26,954,631	28,265,220	28,896,219	29,018,180
メラネシア					
6,617,106	8,188,999	9,739,4831	1,238,616	12,632,621	13,829,649

ミクロネシア					
508,444	595,442	675,537	744,993	802,044	847,219
ポリネシア					
634,726	697,992	757,065	801,975	831,027	850,171
全 世 界					
6,081,527,896	6,825,750,456	7,563,094,182	8,206,457,382	8,759,140,657	9,224,375,956

表 2 平均余命と出生率一覧表(2000 年)

高出生率国 (5 名以上)				低出生率国 (1.5 名以下)			
国 名	平均余命		出 生 率	国 名	平均余命		出 生 率
	男性	女性			男性	女性	
Afghanistan	46.97	45.47	5.79	Andorra	80.57	86.57	1.25
Benin	49.02	50.88	6.23	Armenia	62.12	71.08	1.50
Bhutan	53.16	52.41	5.07	Austria	74.68	81.15	1.39
Burkina Faso	45.86	46.98	6.35	Belarus	62.06	74.52	1.28
Burundi	45.15	46.99	6.16	Bulgaria	67.72	74.89	1.13
Chad	48.86	52.98	6.56	China - Hong Kong SAR	76.97	82.55	1.29
Comoros	58.20	62.68	5.32	China - Macau SAR	78.88	84.64	1.31
Congo, Dem. Rep. of the	46.96	50.98	6.84	Czech Republic	71.23	78.43	1.18
Congo, Rep. of the	44.38	50.85	5.00	Estonia	63.72	76.05	1.21

Cote d'Ivoire	43.58	46.33	5.70	Georgia	61.04	68.28	1.45
Djibouti	49.37	53.10	5.72	Germany	74.47	80.92	1.38
Eritrea	53.73	58.71	5.87	Greece	76.03	81.32	1.33
Ethiopia	43.88	45.51	7.00	Guernsey	76.78	82.88	1.36
Gambia, The	51.65	55.58	5.68	Hungary	67.28	76.30	1.25
Gaza Strip	69.76	72.32	6.42	Italy	75.97	82.52	1.18
Guinea	43.49	48.42	5.39	Japan	77.62	84.15	1.41
Guinea-Bissau	47.12	51.78	5.20	Latvia	62.80	74.90	1.15
Laos	51.58	55.44	5.12	Liechtenstein	75.32	82.60	1.50
Liberia	49.96	52.91	6.36	Lithuania	63.30	75.50	1.37
Madagascar	53.08	57.68	5.80	Poland	69.26	77.82	1.37
Malawi	36.61	37.55	5.18	Portugal	72.44	79.68	1.48
Maldives	61.39	63.80	5.50	Romania	66.36	74.19	1.35
Mali	45.84	48.24	6.81	Russia	62.12	72.83	1.27
Marshall Islands	64.04	67.73	6.55	San Marino	77.68	85.10	1.30
Mauritania	49.06	53.29	6.22	Singapore	77.22	83.35	1.22
Mayotte	57.77	61.96	6.24	Slovakia	69.95	78.20	1.25
Niger	41.74	41.44	7.08	Slovenia	71.20	79.17	1.28
Nigeria	51.07	51.07	5.57	Spain	75.47	82.62	1.15
Oman	69.90	74.29	6.04	Switzerland	76.85	82.76	1.47
Sao Tome and Principe	64.15	67.07	6.02	Ukraine	60.62	71.96	1.29

Saudi Arabia	66.40	69.85	6.25				
Senegal	60.94	64.22	5.12				
Sierra Leone	42.69	48.61	6.01				
Somalia	44.99	48.25	7.11				
Sudan	55.85	58.08	5.35				
Swaziland	37.86	39.40	5.82				
Tanzania	51.04	52.95	5.42				
Togo	52.38	56.38	5.32				
Uganda	42.59	44.17	6.88				
Yemen	58.45	62.05	6.97				
Zambia	37.06	37.53	5.53				
World	62.15	65.51	2.73				

(表 2)は女性 1 名が生涯に出産する子供の数を、多い国と少ない国別にまとめたものですが、おおむね、高出生率の国は途上国、低出生率の国は先進国だと言えます。

高い出生率の国はアフリカとアジアに集中しており、この地域で人口爆発が起こることが容易に推測されます。

更に推測されることは、開発途上国、発展途上国はこれから 50 年の間にどんどん先進国になるということです。日本も 50 年前は貧しかったわけですから、現在、途上国と言われているかなりの国が先進国の仲間入りをすることは間違いありません。先進国が増えるにも関わらず、先進国人口は 11 億で変わらないということは、先進国に極端な少子化現象が起こ

ってくることを意味します。すなわち、開発途上国では極端な人口爆発が起こると同時に、先進国では自分の国の労働力すら確保できない少子化現象が起こってくるのです。

夫婦2人で子供を2人産んで始めて現在の人口を維持できるわけですから、(表2)で表したように、出生率が2を割り込む国では人口が減少し、その結果、労働力の減少や経済的に不安定な時期を迎えることが予測されます。人口爆発による地球全体の環境破壊や資源の枯渇が起こってくると同時に、極端な少子化の影響を受けたさまざまな障害が起こるのです。果たして人類は22世紀を迎えることができるのか、これを真剣に考える必要があるわけです。

2005.5.2

決議 23-34 の怪

1998年版以前の手続要覧には「社会奉仕」の項目に、「(1) ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕―”超我の奉仕”―の哲学であり、”最もよく奉仕する者、最も多く報いられる”という実践理論の原理に基づくものである。」という記述で、二つのロータリーのモットーが併記された「決議 23-34」が掲載されていました。

しかし、2001年版および2004年版の手続要覧では「(1) ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕―”超我の奉仕”―の哲学である。」となっており、「”最もよく奉仕する者、最も多く報いられる”という実践理論の原理に基づくものである。」という記述が抹消された、不完全な「決議 23-34」が掲載されています。

これは、2001年の規定審議会において、決議 01-678「すべてのロータリー用語から性に関する表現を削除することを理事会に要請する件」が採択されたことを受けて、He という単語が使われているという理由で、決議 23-34 の本文から「He profits most who serves best」が記載されている部分を全部削除したためだと思われます。

決議 23-34 は 1923 年の国際大会で採択されて以来、数回改正されており、決議 23-34 の最後につけられている (23-34,26-6,36-15,51-9,66-49) という数字は、1923 年に制定され、1926 年、1936 年、1951 年、1966 年の国際大会においてに正式な手続きを経たうえで、その一部が修正されたことを意味しています。なお、当初は国際大会において規約改正が

行われていましたが、1972年からは、その作業が規定審議会で行われるようになりました。

何れにせよ、一旦採択された決議案を変更しようと思えば、規定審議会に提案して、承認を得ることが必要なのです。しかしながら、2001年および2004年の規定審議会には決議23-34を変更しようという提案はだされていません。規定審議会の議を経ずに、RI理事会が勝手に決議案の内容を変更することは、明らかにルール違反です。

特に決議23-34は、ロータリーの奉仕哲学と実践理論の原理を定義している極めて重要なドキュメントであり、この決議から「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という大切なロータリー・モットーを削除してしまえば、ロータリーの理念、特に職業奉仕理念を正しく説明することは不可能になります。Heが使われているという理由だけで、このようなロータリーの根幹を揺るがすような重大な変更が、規定審議会の議を経ずして、RI理事会の独断でされることは由々しきことであり、ロータリーの将来に大きな不安を感じます。

2005.5.10

ロータリーの歴史的文献

初期のロータリーの歴史を記載した文献は、そんなに数多くはありません。もっとも有名なものは、ポール・ハリスが書いた「**The Founder of Rotary**」(1928年出版)、「**This Rotarian Age**」(1935年出版)、「**My Road to Rotary**」(1948年出版)でしょう。

The Founder of Rotary は「ロータリーの創始者ポール・ハリス」の邦題で、**This Rotarian Age** は「ロータリーの理想と友愛」の邦題で、共に米山梅吉の翻訳したものがあり、**My Road to Rotary** は「わがロータリーへの道」という邦題で、竹山涼一他 2名の共訳による抄録と、「ロータリーへの道」という柴田實訳のものがあります。

The Founder of Rotary は少年時代からロータリー設立までの回想録ですが、ポール・ハリスの生き様なり、ロータリーの設立なりを客観的に記載したものではなく、極めて主観的に回顧している点が特徴です。

This Rotarian Age は単なるロータリーの歴史だけではなく、シカゴでロータリーが生まれた背景やロータリーの理念についても触れているかなり完成度の高い作品です。ちょうど世界大恐慌の影響を受けて、シカゴ・クラブが危機的状況に陥ったため、その状態から脱却するために、ロータリー活動全般に対する分析をシカゴ大学社会科学調査委員会に依頼して、その報告書が「**Rotary ?**」というタイトルで完成した時期と、この本の完成が一致したため、その内容を全面的に書き直す必要が生じたことから、この本の出版が1年遅れたという記録が残っています。

My Road to Rotary は死の直前に完成したこともあって、乏しい記憶からの回顧や過去を美化した記述が目立つようです。

後に「**Golden Wheel**」を書いたイギリスの **David Nicholl** デビッド・ニコルは、「彼の著作は忠実な歴史の記録ではなく、個人的な見解をしたため

たものに過ぎない。特に **My Road to Rotary** は老人のとりとめもない回顧談である。」と手厳しい批評を加えています。

「**Rotary?**」(1934年出版)は私の翻訳があり、「ロータリーの源流・アーカイブス」に収録してありますので、ご一読いただくと、第三者の目から見た、当時のシカゴ・クラブやロータリー全体の動きがよく理解できます。ただし、資料の提供を受けたとは言え、ロータリアンではない第三者がまとめた文献なので、かなりの錯誤があります。しかし、様々な外的・内的要因から苦境に陥っていたシカゴ・クラブを復活させるための報告書ですから、混迷状態にある現在こそ、大いに読む価値のある文献と言えます。

研究熱心なシニア・リーダーの間で、よく読まれている文献が、オーレン・アーノルドの「**Golden Strand**」(1966年出版)です。これも私の翻訳があり「ロータリーの源流・アーカイブス」に収録してありますし、出版物も若干残っていますので、必要な方はご一報ください。アーノルドは元シカゴ・クラブの会員で、この本の出版後退会しています。物語風にシカゴ・クラブの歴史を非常に詳しく記載していますので、何かと参考になります。ただし、後日、いろいろな資料を集めて書き上げたいいわゆる二次資料の常として、かなりの間違いがありますので、その内容をそのまま信じると大変なことになります。特に、1911年にフランク・コリンズが **Service, of self** を発表した背景などは、まったく事実と異なった記述です。なお、千種会の「ロータリー発生史」はこの文献の翻訳です。

ハロルド・トーマスの「**Rotary Mosaic**」(1974年出版)は、歴史書としてはポール・ハリスの作品からの転記の域をでませんが、国際ロータリー会長(1959-60年)としての豊かな経験の中から、ロータリー自身とロータリー活動とロータリアンの進化をいろいろな角度から見て解説を加えた優れた著書です。

ジェームス・ウォルシュの「The First Rotarian」(1979年出版)は是恒正の翻訳したものが出版されています。この本はポール・ハリスの家系に始まって、その生涯とその間のロータリーの歩みが客観的に解説されており、その内容はかなり信憑性が高いものです。

デビッド・ニコルの「Golden Wheel」(1984年出版)はロータリー75周年を記念して、まったく違った角度から、ポール・ハリスの生涯とロータリーの初期の歴史を記述した作品であり、特にイギリス人特有の批判的なまなざしで、ポール・ハリスや初期ロータリー活動を分析している点が特徴的です。現在私が邦訳中ですので、今しばらくお待ちいただきたいと思います。

ポール・ハリスがロータリークラブを作った時、彼は同時に幾つかの親睦クラブに所属していました。当時は雨後の筍のように、至るところで親睦クラブが設立され、それが潰れていった時代でした。ロータリー・クラブがその後成長して120万人もの巨大な組織に発展し、その後100年も継続すると考えた人は誰もいなかったに違いありません。

そのような状態から出発した組織ですから、初期の記録が満足に残っていないことも、いたしかたのないことかも知れません。とにかく、初期のロータリーに関する一次資料はほとんど残っていませんので、断片的に残っている資料をつなぎ合せながら、少しずつ正しいロータリー物語をまとめていかなければなりません。ワン・ロータリー・センターの資料室や倉庫の中には、未整理の膨大な資料が保管されています。その中から宝物を探すためのシカゴ詣でがまだまだ続きそうです。

2005.6.15

会場監督・SAA の職務

SAA (Sergeant-at-arms) ・会場監督は直訳すれば武装した下士官ですが、本来は、イギリスの王室や領主が行う各種の儀式的秩序を守るために設けられた役職で、こういった会合を妨害したり、秩序を乱すのを防ぐために、厳重に武装をした騎士を配置して、これらの会合の監督させたことから、この名前がつけました。その後は中世ヨーロッパの宮廷で、外国の賓客を招いたレセプションが開かれる場合、その会場をとりしきる役職となりましたが、その制度がアメリカの議会の導入され、それがロータリーにも及んだものと考えられます。

ロータリーで SAA が正式な役職として定められたのは 1906 年で、ポール・ハリス、マックス・ウオルフ、チャールス・ニュートンがシカゴ・クラブの最初の SAA に就任しました。

ロータリーのあらゆる会合では、SAA は最高の権限を持つ執行機関の役員であり、すべての会員は SAA の指示に従わなければなりません。

ゾーンや RI レベルの会合では、SAA は熟練したパスト・ガバナーが務めるのが普通です。規定審議会や国際協議会のように義務出席が科せられた参加者が大勢いるような会合では、単に会場の秩序を守るだけではなく、遅刻したり欠席したりする参加者への対応も SAA の仕事の一部となります。正しく鬼軍曹のような形相で、もたもたしている参加者を会場に追いたてますが、誰一人としてこれに逆らう人はなく、全員が諾としてこれに従う様は見事としか言いようがありません。また、国際大会のような大規模な会合では、本会議場や各種の催し物会場の設営・監督から、会場案内、観光案内に至るまで、膨大な量の仕事が SAA に集中します。従って、十数名のベテラン・パスト・ガバナーで構成されたシニア SAA の元に、2-300

名のロータリアンの SAA、さらに 500-1000 名規模の一般 SAA という規模で大会運営に当たります。

クラブ・レベルにおいては、SAA は審議系列とは一線を画する立場上、理事会に出席する義務はありませんが、もし、必要があれば、理事会に出席して発言することができます。審議機関に属さないので、SAA 委員会と言う呼称をつけるのは間違いです。最近の傾向として、SAA の任務がニコニコ箱の集金係に化しているクラブが多いようですが、主たる職務は、あくまでも、会場監督であることを忘れてはなりません。

例会場の管理権者であることから、強いリーダーシップが要求されるので、会長経験者およびロータリアンとして経験が深い会員より任命することが望ましく、更にその役職の重要性を考えると、副 SAA を含めて全会員の 10% 以上の数が望ましいとされています。

具体的職務内容

◎例会の司会進行

◎例会場への入場、退場許可。例会場の開門、閉門。

◎早退、遅刻の承認や拒否。

◎私語に対する警告。

◎卓話の時間励行。

◎その他、例会場の秩序を乱す行為に対する警告と退場命令。

◎例会場の設営・・・テーブルの配置、座席の指定（親睦活動委員会と共に）

◎食事の献立、業者の選定等食事の手配

◎ニコニコ箱の管理とその募金状況の報告

以上のように、SAA はロータリーのあらゆる会合において、最高の権限を持っている役員であり、開門、閉門、私語の取り締まり、会場の秩序の維持、タイム・コントロールなどが主な役割です。

会合の司会を任されることもありますが、会長もまた、あらゆる会合の議長を務めると定められている関係で、会合の司会を務めることもあるので、この役割分担は臨機応変にする必要があります。

ニコニコ箱は日本特有の制度であり、外国にはこり風習はありません。従ってSAAがニコニコ箱の管理をするのは日本特有の習慣であって、SAAの本来の職務ではありません。

米山梅吉翁のガバナー月信には、SAAの役割について次のように記載されています。

「終りに、サージャント・アット・アームスに就て一言。此役目中々御苦勞に有之、會則にも其職責一定せず、會長または理事會の定むる所に従ふ次第に候が、東京クラブにては戯れに警視總監など呼び候こともあり、御目付とも可申、世話人も可申、或は又大きく言へば議會の院内総務にも當り、集會中は司會者に次ぎ會の規律を保つためには重大なる権能を附興され居るもの、其中特に希望され候は欠席者遅刻者等に注意してセクレタリーの仕事も助くると共に、何處にもある、會員中別懇の連中にて或るテーブルを占領するとき弊を矯め、或テーブルに常連の一村が出来る様なことのなきよう致すことに候。

因に、華府のハリス氏、米國第一の寫眞業者として有名と聞及び候が、毎年大會毎に必ず出席してサージャント・アット・アームスとなり、大會後の國際役員會議に於ても一週間ブツ通しにて議場を整理し、議案の配布其他些細のことまで世話を焼き又八釜しく小言も申し、何れも謹んで其言に従へるには敬服に候。」

2005.6.22

RI テーマに寄せて

新しいロータリー年度が始まりました。

ステンハマーRI 会長は本年度の RI テーマとして「Service above self」を發表し、皆がよく知っているのに今まで一度もテーマとして使われたことのない言葉をリサイクルしたと述べています。ロータリーには素晴らしいモットーが定められているのに、毎年 RI 会長が別の新しいテーマを發表するのはおかしいという批判があり、これを廃止しようという提案が規定審議会に提案されていただけに、当を得た判断だと思っ一方で、第二モットーがその対象から外されたことに、ロータリーの将来に対して、一抹の不安がよぎるのは、私だけでしょうか。

「1911 年、ロータリアンは Service above self という標語を熱意をもって採択しました。」とステンハマー会長は述べていますが、これは明らかに間違いであり、1911 年の大会で採択されたのは He profits most who serves best だけであって Service above self が採択されたという記録は残っていません。さらに 1911 年にフランク・コリンズが述べた言葉は、Service above self ではなくて Service, not self です。

コリンズのスピーチ原稿が大会議事録に掲載されていないために、この Service, not self の真意について知っている人は少ないようです。

Service, not self は非常に精神性の高い言葉であって、自己の存在を否定して他人のために奉仕することであるとか、自己の存在を認めた上で、他人にも奉仕をする意味を込めて、Service above self に変更したとか解説する人もいますが、これはコリンズの論文を読んだことのない人が引き起こした大きな間違いで、Service, not self はそのような高い次元の言葉ではありません。

私は何回か RI 本部の資料室を訪れて、1911 年 11 月に発行された *The National Rotarian* 第 2 巻第 1 号に *Service, not self* に関するコリンズのスピーチ原稿が掲載されていることをつきとめて、その全文を翻訳した結果、1.利益を得ようと思ってロータリーに入るのは間違いである。2. 会員同士の物質的相互扶助をさらに推し進める必要がある。3.会員同士の相互取引には限界があるので、その対象を一般にも広げる必要がある。という内容であって、シェルドンの *He profits most who serves best* をさらに低い次元から具体的に説明した言葉であることが判りました。

誰が、何時、どのような経緯で、*Service, not self* を *Service above self* に変えたのかは、現時点ではそれを証明する資料が見つからないので不明です。シェルドンが変えたという人もいますが、これは *Golden Strand* という本に、その可能性が示唆されているに過ぎませんし、この本の著者はコリンズの論文の内容を全く知らない状態でこの本を書いたらしく、かなりの部分に間違いがありますので、この示唆に関する信頼性は低いと考えられます。ちなみにコリンズの職業は弁護士と記載されていますが、正しい職業は果実商です。

Service, not self の真意はコリンズの論文を、*He profits most who serves best* はシェルドンの論文を読めば完全に理解することができますが、*Service above self* については、この言葉を作った作者が不明ですし、どこにも、この言葉の真意を説明した資料は残っていません。私たちロータリアンは *Service above self* を第一モットーに掲げ、これにいろいろと解釈を加えていますが、いずれの解釈も憶測に基づいたものに過ぎないのです。

2005.7.1

グローバル・ネットワーク・グループ

国際ロータリー理事会は、ロータリー親睦活動プログラムの見直しを行って、新しい発想に基づいて「グローバル・ネットワーク・グループ」という新しいカテゴリーを設け、その下に、「ロータリー親睦活動」と「ロータリアン活動グループ」を設置することを決定しました。

「奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって国際間の理解と親善と平和を推進すること」というロータリーの国際奉仕の目的を実現するための具体的な活動として、国際奉仕活動の中にロータリー親睦活動というプログラムが設けられています。

1970年に正式にRIプログラムとして承認された「世界親睦活動 WFA」は、1993年に当時パイロット・プログラムであった「国際職業連絡グループ IVCG」と合併して、「ロータリー趣味・職業別親睦活動 RRVF」となりました。更に、2001年にはこれに健康・医療関係のボランティア活動グループが加わって、「ロータリー親睦活動 Rotary Fellowship RF」となってロータリーの構成プログラムの一つと位置づけられ、6月がロータリー親睦活動月間に指定されました。

現在は趣味による同好会組織、職業別の同業者組織、目的別のボランティア組織という全く性格の違う三つの組織が、「ロータリー親睦活動」という一つのカテゴリーの中に、無理に押し込められている状況です。趣味や職業別のグループは会員相互の親睦を図る組織であるのに対して、ボランティア・グループは人道的奉仕活動の実践という全く違った目的を持った組織であり、前者は会員が支払う会費によって全ての経費を賄う必要があるのに対して、後者は寄付金やロータリー財団からの補助金で実務作業を行うという大きな差異があります。

地域社会のニーズによって、今後、いろいろな種類のボランティア・グループが設立されることが予測されるので、思い切った組織の再構築が必要になったものと思われます。

今回の変更の概要は次の通りです。

1. 「ロータリー親睦活動」をロータリーの構成プログラムから除外します。構成プログラムの定義は「RI 理事会がクラブおよび地区のために推奨し、枠組みと指針を含んで組織された活動」であり、「ロータリー親睦活動」は、クラブや地区レベルの活動ではなく、むしろ、個人の活動なので、この定義を満たさないというのがその理由です。
2. 新しい発想に基づいて、国際奉仕活動の中に「グローバル・ネットワーク・グループ Global Networking Group」というカテゴリを作り、その中に、「ロータリー親睦活動」と「ロータリアン活動グループ」とを設置します。グローバル・ネットワーク・グループは「国際的ベースで関心のある共有な問題に焦点を合わせて組織化されたロータリアン個人のグループ」(ロータリー章典 40.010)と定義されています。
3. グローバル・ネットワーク・グループ」が二つに分けられて、職業別・趣味別の活動を進めるために集まったロータリアンのグループが、「ロータリー親睦活動」という現在のタイトルの下に留まり、ロータリーの綱領を推進する国際奉仕プロジェクトを実施する目的のために作られたロータリアンのボランティア組織が、「ロータリアン活動グループ」と呼ばれることとなります。すなわち現在のロータリー親睦活動の中で趣味や職業別のグループが「ロータリー親睦活動」という古い名称を引き継ぎ、現在の保健や衛生などのボランティア活動に焦点をあてたグループや今後新設されると思われる新しい国際奉仕に関するボランティア活動グループが「ロータリアン活動グループ」のカテゴリに入るものと思われます。

4. 政治的、宗教的な活動をすることは認められません。
5. ロータリアン家族やローターアクターの参加が認められます。
6. 今年一年をかけて、「ロータリー親睦活動グループ」の整理と、「ロータリアン活動グループ」の設立作業を行って、2006年7月から、新しい制度に移行する予定です。
7. 「ロータリー親睦活動」のグループが奉仕活動を行うことを禁止したり、「ロータリー活動グループ」が親睦を楽しむことを禁止するものではありませんが、双方のグループは、自分の所属するグループの主な機能が何であるのかを考えて活動することが要求されます。
8. 新しいロータリー章典には、「ロータリー親睦活動」および「ロータリー活動グループ」に関する規定が記載されます。(2005年6月に発表されたロータリー章典には、この変更は記載されていないので、次回に改訂される章典に記載されるものと思われます。)

ロータリーの活動は、人道的主義に基づくボランティア活動を推進する方向に大きく傾いていますが、クラブには自治権があって、奉仕活動の実践はこのクラブ自治権の範疇にあるために、RIがこれらの活動をクラブに強制することはできません。さらに、RIの会員はクラブであってロータリアン個人ではありませんから、ロータリアン個人に対して、ボランティア活動を積極的に推進するように命令することもできません。したがって、ロータリアンが目的意識を持って個人レベルで参加することを前提にした、「ロータリー活動グループ」のような組織を作って、この組織にロータリー財団の基金を使う権限を与えて、ボランティア活動をしてもらうのが、最善の方法だと思います。

私は、目的別のボランティア活動をするマン・パワーを組織化するために、ロータリー親睦活動グループの中にボランティアをする意思のある人を集めた第3のグループを作ることを考え付いて、2001年3月にデブリ

ン会長に提案しました。デブリン会長からは、WCS と関連付けて、前向きに考えるというお返事を頂きました。その後、2002年1月から、私の提案どおりに、ロータリー親睦活動の中に、「各種の保健、医療問題に関心を持つグループ」が加えられると共に、ロータリー財団からの補助金がつくように改正されて、今日に至っています。

私の提案の詳細は「炉辺談話 81、82 ボランティア活動に関する新しい発想」「炉辺談話 145 ロータリー親睦活動とボランティア・グループ」に記載していますので、ご一読ください。今回の改正は、私の提案と全く一致するものなので、非常に喜んでいます。

2005.7.7

インターシティ・ミーティング IM

1950年版の「手続要覧」には、グループ毎に、分区代理が主催して都市連合会 IM [Intercity Meeting]を開かなければならないことが明記されています。更に古い1926年版「手続要覧」にはIMに関する記載はありませんので、いつの頃からこの制度ができたのかは不明です。

初期のIMは、もっぱらフォーラム形式が取られていたため、ICGF [Inter-City General Forum]都市連合会フォーラムと呼ばれていましたが、後にIGF [Intercity General Forum]と名称が変更され、分区単位で行う勉強と親睦を深める会合として定着していました。

当初はガバナーが主催する地区の行事でしたから、その費用はRIから支払われてしまいましたが、1969年のRI理事会は、経済的理由からその費用を支払わないことを定め、それ以降は、IMを実施するか否かはガバナーの裁量に委ねられることになりました。その時点で、世界中のほとんどの地区ではIMを中止しましたが、日本では、ガバナーが分区代理に依頼する形でIMを続行しました。

しかし、RIもこの種のフォーラムの必要性を考えていたらしく、一時期、一日情報研究会 One day Training Seminar を推奨したことがありましたが、これも短期間で立ち消えになってしまいました。当時、日本では、IMと一日情報研究会を共に開催する地区が多かったように記憶しています。その後の「手続要覧」には、1995年版までは、分区代理がIMを主催するという表現が依然として残されたままでしたが、これはあくまでもガバナーの判断でIMを開催してもかまわないという意味です。

1989年に、一般的に使われていたIGFの表現が、IMに統一されました。これに対していろいろと異論がでましたが、正式呼称は元来IMであり、IGFというのはIMの形式を表す言葉なので、あまりこの用語にはこだわ

る必要はないと思います。現実には日本では、IM の名前の下で、実質的には IGF が開かれています。

1997 年からの地区リーダーシップ・プラン DLP の採用によって、1998 年版手続要覧から、都市連合会と分区代理の文字が消えたことを受けて、IM に関する記載も抹消されて現在に至っています。

IM という言葉はいろいろな意味で使われ、かつてポール・ハリスが名誉会長としてイギリスを訪れた際、地本のクラブが開催した歓迎会のことを IM と表現しています。ただし、この IM は [Informed Meeting] 情報提供集会の略であり、その他非公式会合 [Informal Meeting] の意味でも使われることもあります。

近隣クラブが共通のテーマで語り合い、知己の輪を広げる意義は大きく、殆どの IM はフォーラムと懇親会がセットになった IGF 形式がとられていますが、必ずしもこれにこだわる必要はなく、セミナーの形式がとられることもたびたびあります。

さて、DLP の採用によって、分区代理が廃止され、ガバナー補佐が置かれたことによって、IM の主催者とホスト・クラブの関係に混乱が起きてきました。

従来は分区内の暗黙の了解によって、輪番制で分区代理が就任するケースが多く、分区代理の指名を受けたクラブが順番に IM のホストをすれば良かったわけです。しかし、DLP に基づくガバナー補佐の任命は、ガバナーがグループ内で最も相応しい人を直接指名するのが原則であり、必ずしもグループ内クラブから輪番制で指名されるわけではありません。さらに、3 回まで再任される可能性があるため、ガバナー補佐のホーム・クラブが、IM のホストをするという従来の方法では、突然スキップしたり、連続して IM のホストをしなければならない場合が生じます。

外国では、IM を開催する地区はほとんどありませんから、ガバナー補佐の任命と IM のホスト・クラブを関連づけて考える必要はありませんが、日本ではそうはいかないのが現状です。

IM は RI の正式行事ではありませんから、IM を開催するか否か、誰が主催するかについては、従来通り、全てガバナーの自由裁量件の下にあると解釈すべきでしょう。これを機会に IM を止めることを宣言するガバナーや、開催するか否かをガバナー補佐に一任するガバナーもいるようです。しかし、日本では完全に定着した素晴らしい会合ですから、継続すべきであるというのが私の個人的意見です。

ただし、ガバナー補佐の選任と IM のホストとは分離して考える必要があります。

ガバナー補佐は、DLP の趣旨を尊重して、グループの輪番制ではなく、グループ内から最適の人を選任する必要があります。IM のホストは、グループ内の情報交換と親睦を深めるという意味から、従来通りグループ内の輪番制で行うという方式が、無難な方法ではないかと思います。

なお、IM の主催者は、ガバナー補佐が勤めるべきでしょう。主催者とホスト・クラブが異なるケースもでてきますが、地区大会のホスト・クラブが必ずしもガバナーの所属クラブでない場合もありますので、これと同様に考えるべきでしょう。

2005.7.14

Service before self

私たちが慣れ親しんでいるロータリーの第一モットー“Service above self”の原型が、“Service not self”であることは、ほとんどのロータリアンにとっては周知の事実ですが、それ以外に“Service before self”というモットーが存在していたことを知っている人はほとんどいないと思います。私は“Service above self”という言葉が、何時、誰によって提唱されたかを知るために、過去の国際大会議事録を調べている最中ですが、その過程で、1921年の国際大会において、「国際ロータリークラブ連合会のモットーとなっている”

Service above self”、“Service not self”、“Service before self”をモットーから正式に除外することを決議する件。」という提案がだされていることを発見しました。

規定審議会が正式な立法機関と定められて別個に開催されるようになったのは1972年からであり、それ以前は国際大会の中ですべての立法案が審議されていました。そして、1921年の国際大会でこの案件が決議案として提案されているのです。

「国際ロータリークラブ連合会のモットーは”He profits most who serves best”であるが、同時に”Service above self”、“Service not self”、“Service before self”もモットーとして使用されている。本来のモットーである”He profits most who serves best”はロータリーの精神を哲学的な表現で完全に表したものであるのに反して、これらの三つのモットーは、それを補足説明しているに過ぎない。従って、ロータリーのモットーは”He profits most who serves best”のみに限定するように、立法措置を講じるべきである。」と言うのがこの決議案の提案理由です。

審議過程の中で、マルホランドが「“Service not self”は何時、ロータリーの正式なモットーになったのか」という質問をしています。スネデコル会長は「知らない」と答えています。

事実、“Service not self”は、1911年の国際大会で、フランク・コリンズが即興スピーチの中で使った言葉ですが、大会でモットーとして採択されたという記録はありませんから、スネデコル会長の「知らない」という回答は正しい回答とすることができます。

この大会でアーサー・シェルドンが提唱した “He profits most who serves best” がロータリー宣言の結語として正式に採択され、シェルドンのスピーチ原稿が大会議事録に収録されました。また、フランク・コリンズの “Service not self” という言葉も大会参加者に強い印象を与えました。当時は、スローガンやモットーという言葉の定義も確定していなかったもので、この二つの言葉は誰が定めたか判らないまま、モットーとして徐々にロータリアンの間に広がっていったものと思われます。

フランク・コリンズの “Service not self” は、彼のスピーチ原稿が公表されなかったことが災いして、間違った解釈をされるようになってきます。“Service not self” は自己を犠牲にして他人に奉仕すること、すなわち「無私の奉仕」だと誤解した人たちが、自己の存在を認めた上で他人に奉仕する意味で “Service above self 超我の奉仕” という言葉を作ったものと思われませんが、この決議案の中から、これ以外にも “Service before self” というモットーも存在していたことが判りました。

私たちは “Service not self” が “Service above self” に変化したと考えていましたが、決してそのような単純な変化ではなく、“Service before self” を含めて、「利己」と「利他」と「奉仕」の優先順位を示すためのいろいろな表現が使われていたのではないかと思います。

結局この提案は、” He profits most who serves best “ の ” profits “を巡る論争にまで発展して、” profits “ をロータリーの理念と関連付けて正しく解釈することは不可能なので、“ Service not self”はどうしても残す必要があるという理由から、否決されました。質疑応答の中で、ホノルルの代表議員が、「” He profits most who serves best “を、その真意を伝えるように日本語で正しく翻訳することは不可能であり、東洋にこのスローガンを広めることはできない。」と述べているのが印象的でした。

それを裏付けるかのように、戦前の日本のロータリーの記録の中には ” Service above self “に関する説明や解説は出てきますが、” He profits most who serves best “に関する記述はほとんどありません。

この決議案の提案理由の説明や質疑応答を読むと、“ Service above self “、“ Service not self”、“ Service before self “の三つの言葉が無秩序にでてくるので、当時どの言葉が優先的に使われていたのかを推測することはできませんし、スローガンやモットーという言葉の使い方にも一貫性はありません。

結局この大会では、ロータリーのモットーとして” He profits most who serves best “、“ Service above self “、“ Service not self”、“ Service before self “の四つが共に残ることになりますが、1923年の国際大会において、実質的に“ Service not self”、“ Service before self “が使用停止となり、決議 23-34 によって” Service above self “がロータリーの奉仕哲学として、“ He profits most who serves best “が実践理論の原理として残され、1950年になってやっとこの二つの言葉がロータリー・モットーとして、正式な市民権を得ることになるわけです。

最初からロータリーのモットーとして不動の地位にあった” He profits most who serves best “の存続が危惧される昨今に比して、この当時は”

Service above self “の存続が風前の灯であったことに、時代の移り変わりの激しさを感じます。

2005.7.21

決議 23-34 採択の背景

1906年にドナルド・カーターによって対社会的奉仕活動という概念を導入したロータリークラブは、徐々にその活動を広げ、やがてその対象を身体障害児対策に集中します。その活動は、1913年に始まったシラキューズ・クラブによる身体障害児のリハビリテーションから始まり、1915年にはトレド・クラブによる肢体不自由児への教育事業を経て、エリリア・クラブによるオハイオ州身体障害児協会の設立、最終的には全米身体障害児協会の設立に発展していきます。全米の多くの地方クラブが身体障害児対策に熱中し、さながら福祉団体か慈善団体の様相を呈してきたというのが、当時の実情でしたが、身体障害児に対する奉仕活動に熱中するあまり、その「奉仕」のあり方をめぐって論争が起こって来ました。

職業奉仕派の人たちは、クラブ例会で会得した高い職業モラルに基づいてロータリアンの心に奉仕理念を形成させ、自分の職場や地域社会の人々の幸せを考えながら、職業人としての生活を歩み、その考えを業界全体に広げていくことが、全ての人々に幸せをもたらし、それが地域社会の人々への奉仕につながることを確信していました。もし、職業奉仕以外の分野で、奉仕に関する社会的ニーズがあれば、夫々の会員が個人の奉仕活動として実施するか、自分が属している職域や地域社会の団体活動として実施すればよいのであって、クラブはあくまでも、どのような社会的ニーズがあるのかを提唱するだけに止めるべきであり、社会奉仕活動の実践は、ロータリークラブが実施母体になるのではなく、そのニーズを世に訴え、それに対処する運動が盛り上がるような触媒として機能すべきであり、どうしても、地域社会に何かしたいのならば、職業上得られた

Profits から個人的に行ったらよい、という考え方でした。

これに対して、[奉仕活動の実践]に重きをおく社会奉仕派は、現実に身体障害者や貧困などの深刻な社会問題が山積し、これまでにロータリークラブが実施した社会奉仕活動が実効をあげていることを根拠に、奉仕の機会を見出して、それを実践することこそロータリー運動の真髄であり、単に、奉仕の心を説き奉仕の提唱に止まる態度は、単なる責任回避に過ぎないと反論しました。

職業奉仕派と社会奉仕派との論争は、個人奉仕と団体奉仕、さらに金銭的奉仕の是非にまで発展して、綱領から社会奉仕の項目を外すべきだという極論まで飛び出すほどの、激しい対立が続きました。特に大規模な事業に多額の金銭的支出を余儀なくされているクラブによる団体奉仕活動を、ロータリーの社会奉仕として認めるか否かが議論の中心になりました。

ロータリーの思考体系には、その原則を崩せばロータリー運動を成立さし得ない必要条件と、ロータリアンやクラブの考え方や行動に対して、その立場と善意を尊重して、容認することができる充分条件があります。奉仕の実践は、将にこの充分条件の分野に入る事柄なので、この際、従来から行われている色々な社会奉仕の考え方や行動を調和させることが、是非とも必要でした。ロータリアンが遵守すべき基本としてロータリーの綱領が定められていたものの、この綱領は奉仕活動の実践を規定するものではなかったのです。

相異なる二つの考え方の中で、当時の理事会は的確な結論をだすことができず、右往左往します。1922年、R I 理事会はエリリア、トレド、クリーブランド各クラブより共同提案を受けて、決議 22-17 を採択しました。

決議 22-17

ロータリアンが身体障害児に対する関心を示し、かつ彼ら障害児に身体的矯正や外科的治療を施すことが有効な場合には、これを援助したいという意欲を表明していることに鑑み、国際ロータリー第 13 回大会は、各ロ

ータークラブが行っている、このような人道的活動を賞揚し、且つ本大会に出席している各代表者に対し、この問題に関する注意を喚起し、またこの運動が各クラブの地域社会に於ける奉仕の機会を提供するものであることを、それぞれのクラブに認識させることを決議する。

しかし、この決議を行った直後に開催された理事会では、職業奉仕派の立場を考慮してか、これと全く相い反する次のような理事会決定を行っているのです。

理事会決定

国際ロータリーは世界各国の身体障害児問題が重要であることを認め、各ロータリークラブの会員が何らかの形で身体障害児救済の事業に関係することを喜ぶであろう。然し、国際ロータリーは気のりしないロータリアンにこの種の事業に関係することを強制することは望ましくないと信じている。国際ロータリーはまた、ロータリークラブやロータリー会員が、身体障害児救済事業のような立派な仕事でも、これに全く夢中になったために、ロータリークラブの真の役割が忘却され、ロータリーの基本的で特色ある目的が見失われ、または忘れられるならば、それは望ましいことでもないし、またロータリー福祉のためにもならないものと考えている。

その後、エリリアクラブの強い要請を受けたポール・ハリスの働きかけによって理事会の態度が豹変し、1923年のセントルイス大会において「決議 23-8 障害児並びにその救助活動に従事する国際的組織を支援せんとする障害児救済に関する方針採択の件」という決議を提案する姿勢を示しました。このたび、大会議事録を入手しましたので、決議 23-8 の全文をご紹介します。

決議 23-8

国際ロータリー理事会提案

今や数多くのロータリークラブやロータリアンが、オハイオ州やロータリーの計画として知られている基本的な身体障害児活動に対して関心を抱いている。ロータリークラブはこの計画の下で、身体障害児活動に対する二つの方向からの役割において、有利な立場に立っているものと思われる。一つは職員の安全な協力と州や郡などの自治体の部局や職員の協力が得られることであり、もう一つは、身体障害児(および両親、保護者)に対する個人的な接触によって、これらの子供を正常で、健康で、自立できる人間にする機会を与えることができることである。

統計によれば、ロータリークラブが存在するすべての国で、18才以下の人口1000人に対して3人の割合で身体障害児が存在する。身体障害児に対する活動は、近代文明の恩恵を受ける者として、社会的かつ人道的な義務である。国際ロータリーは、身体障害児に対する活動をロータリーの主要な活動として、年次プログラム活動に組み入れるべきであることを、第14回年次大会において、決議する。

理事会の決定によってその義務が明記された身体障害児活動委員会として5人のロータリアンによる委員会が、理事会の承認の下で、毎年会長によって任命されることを決議する。理事会は、委員会に協力するために、身体障害児活動のための事務局を設置することを命じると共に、委員会と事務局の指針として、次の方針を採択することを決議する。

国際ロータリーは、ロータリークラブを通じて、次の提案を行う。

(1) 米国の様々な州や世界の様々な国における身体障害児について、身体障害児に対する現況と立法上の措置を調査すること。

(2) 個々の身体障害児の必要性に従って、様々な州やその他の行政部門における立法上の措置に適した定型的な計画を立てること。

(3)身体障害児に対する関心を高めるために、様々な州や国の行政部門の中で身体障害児の福祉を促進することを目的とする協会組織を支援することを奨励すること。

(4)情報やアイデアの交換およびその他の実用的な方法によって、整形外科の振興を支援し、必要な研究の継続し、予防法を開発し、病院管理、設備、身体障害児の治療法の改善を図ること。

(5)世界中の身体障害児が高度な医学や外科手術や教育を身近なものに出来るように、その手順の標準形式を構築すること。

(6)すべての身体障害児に専門教育や職業教育を提供するために、身体障害児のための特殊学校を創設すること。

すべてのロータリークラブやロータリアンがこのプログラムに関心を抱き、それぞれの地域社会の必要性に従って、この活動に参加することを決議する。

身体障害児活動のプログラムを成功裏に達成するための資金を捻出するために、この活動を実践するためにすべてのロータリアンが1ドルの特別寄付をすることを決議する。

クラブ幹事は、クラブの会員からの寄付金を受けて、国際ロータリーの事務総長に送金する権限を与えることを決議する。事務総長は他の収支と、国際ロータリーが身体障害児のために行った活動に関する収入と支出を別個に記載し、理事会は毎月その口座の収支報告を行うものとする。国際ロータリーの年次大会において、会長と事務総長は昨年度の身体障害児活動の完全な報告を行うことを決議する。

注：この活動のために、一人当たりの1.00ドルの特別寄付金を要請すれば、結果として、北アメリカのロータリアンは少なくとも5万ドルを寄付することになって、この金額は身体障害児のための委員会および部局活動

の2年分を賄うものと思われる。5万ドル以上を受け取れば、3年間の活動に備えることも可能であるが、最初の2年間の活動に使うべきである。

国際大会において、会長、理事会、地区ガバナーが提言することによって、北アメリカのロータリアンがこの寄付金を集めることが予想される。

約25,000ドルの年間費用は、部局の責任者、4人の速記者および事務局員、印刷費、通信費、文具、事務所賃貸料および諸経費、委員長・委員・部局の責任者が各州の組織を開発したり活動したりするための旅費を賄うものである。

これは積極的に身体障害児対策を推奨するために、国際身体障害児協会の仕事をロータリーが代行すると共に、その費用を援助するために、国際ロータリーが年間1ドルの人頭分担金を徴収することを定めようというものであり、もしも、これが決議されれば、職業奉仕派が反論するのは当然としても、具体的な奉仕活動の実践と募金活動を国際ロータリーがクラブやロータリアンに強制することになり、クラブ自治権を巡って、收拾がつかない状態になることは必至でした。

この決議案に反対した人たちは、一大反対キャンペーンを行って代議員たちを説得しました。その結果、ナッシュビル・クラブのウィル・メーニアと、シカゴ・クラブのポール・ウエストバーグによって提案された決議

23-34の成立と引き替えに、国際ロータリーが決議23-8を取り下げることになって、ロータリー分裂の危機ははらんだこの論争に終止符が打たれたのです。

決議委員の指名を受けたメーニアとウエストバーグは決議

23-34をたった2日で書き上げ、この1,000語からなる決議は直ちに大会で皆に披露され、一言の訂正もなく採択されました。

2005.8.5

過去の国際大会または規定審議会で 採択された主な立法案

1970年アトランタ国際大会

- ・ 各偶数年に、国際大会の一部として規定審議会を開催する。審議会の決定はすべて国際大会の決定としての効力を有する。
- ・ 国際ロータリーの会長候補者は国際ロータリーの理事経験者であること、理事候補者は地区ガバナー経験者であることを要する。
- ・ クラブの政治活動を禁止する。

1972年ヒューストン国際大会

- ・ 例会の欠席補填(メイクアップ)期間を、直前のクラブ例会の定例の時刻から直後のクラブ例会の定例の時刻までの間とする。

1974年ミネアポリスーセントポール国際大会

- ・ 3年目ごとに国際大会の一部として規定審議会を開催する。
- ・ 市、区、その他の自治体地域内においてクラブの地域限界を同じくする二つ以上のロータリークラブを認める。
- ・ 会員が地区の提唱する奉仕事業に従事しているため例会を欠席した場合、その事業が僻遠の地でなされ欠席を補填する機会が全く得られないときは、例会に出席したものとみなす。

1977年サンフランシスコ規定審議会

- ・ クラブ会長は、会長に就任する日の直前1年以上2年以内に選挙する。会長に選ばれた者は、会長に就任する直前年度に会長エレクトを勤め、会長を勤めるべきロータリー年度の7月1日に会長に就任する。
- ・ 地区ガバナーの指示のもとに開催された地区委員会への出席をメイクアップと認める。

- ・ 公式地域雑誌の購読をもってロータリーの機関雑誌の購読に代えることができる。

1980年シカゴ規定審議会

- ・ 前回の例会の翌日から次の例会の前日までの間であれば、週をまたがって例会を変更することができる。
- ・ 会員は、半期の例会のうち30%はホームクラブに出席しなければならない。
- ・ クラブの指示により、ローターアクト、仮ローターアクト、インターアクト、仮インターアクトのクラブ例会に出席したときはメイクアップと認める。

1983年トロント規定審議会

- ・ 会員の事業場またはその住居は、クラブの区域限界内になくともそのクラブが存在する市の行政区域内または直接に隣接するクラブの区域限界内にあればよい。
- ・ 国際ロータリーの役職に就くために選挙運動または投票依頼をしてはならない。
- ・ クラブ会長に選ばれた人は、地区協議会に出席しなければならない。正当理由により出席できない場合は、所属クラブから代理を派遣しなければならない。
- ・ 例会に充当された時間の少なくとも60%を出席しないと欠席とみなされる。

1986年シカゴ規定審議会

- ・ クラブ会長を指導・訓練するために、国際協議会終了後1ヶ月以内、すくなくとも4月15日までに、ガバナーノミニニーがガバナーと協力して会長エレクト研修セミナーを開催する。
- ・ 地区は、地区大会の決議によって「地区資金」という基金を設けても差

し支えない。ひとり当りの賦課金の額は、地区協議会に出席した次期クラブ会長の4分の3の承認を要する。

- ・ 会員身分に関する標準ロータリークラブ定款の定めを全面的に書き換えた。

1989年シンガポール規定審議会

- ・ クラブ理事会の裁量で、1ロータリー年度に2回までクラブ例会を取りやめることができる。
- ・ ロータリーの存在しない国々を旅行するときは例会出席を免除する。
- ・ ロータリー・クラブの会員資格を男子のみに限定する規定を改め、女性の入会を認める。
- ・ 「Service above self 超我の奉仕」の標語を、ロータリーの第1モットーと定める。

1992年アナハイム規定審議会

- ・ クラブ会長エレクトが、PETS(会長エレクト研修セミナー)と地区協議会に出席することを義務付ける。
- ・ 3回以上連続して例会を開催しないことを禁止する。
- ・ 4日以上海外旅行している場合の他国での例会出席は、メイクアップ期間に拘束されない。
- ・ クラブの提出した立法案は、まず地区大会で審議することを義務付けた。
- ・ 社会奉仕に関する新声明を採択した(決議案)。

1995年カラカス規定審議会

- ・ メイクアップ期間を延長し、定例例会の前後14日とした。
- ・ RIの文献に、性別を示す言葉を使わないようにする(決議案)。
- ・ 西暦2000年までにポリオを撲滅し、2005年までに撲滅の証明をすることが国際ロータリーの最優先目標であることを支持し是認する(決議案)。

1998年デリー規定審議会

- ・クラブ理事会承認のクラブ奉仕プロジェクトへの出席をメイクアップと認める。
- ・ `ガバナーを国際大会で1年早く選挙し、ガバナーエレクトを1年間勤めるようにする。
- ・ 規定審議会をもって RI の唯一の立法機関とする。

2001年シカゴ規定審議会

- ・ クラブ理事会の裁量で1ロータリー年度に4回まで例会を取りやめることができるが、4回以上続けて例会を取りやめてはならない。
- ・ クラブ会員が死亡した場合に例会を取りやめることができる。
- ・ 半期例会出席率が60%に達せず、またはホームクラブ出席率が30%に達しない場合、もしくは連続4回例会欠席の場合も、理事会の裁量で会員資格を終結させないことができる。
- ・ 例会中に不意にその場を去らなければならなくなったために例会時間の60%に出席できなかった場合、理事会が妥当と認めれば出席扱いとする。
- ・ クラブがスポンサーした地域社会における行事や会合、または理事会が承認し指定した奉仕委員会会合への出席、もしくはクラブ理事会への出席を例会出席と認める。
- ・ クラブの指示がなくとも、ローターアクト、インターアクト、ロータリー村落共同体、仮ローターアクト、仮インターアクト、仮村落共同体の例会に出席すればメイクアップと認める。
- ・ 会員の出席免除の条件をクラブ理事会が決定することができる。
- ・ 会員の種類を正会員と名誉会員の2種類とし、同一職業分類の正会員については5名以内、会員数が51名以上のクラブではその10%まで認める。
- ・ 試験的プログラムとして、RI 定款ならびに RI 細則および標準クラブ

定款に合致しない定款を有するニューモデル・クラブを、全世界で5年間200クラブを限度として認める。

- ・クラブが性別を一つに限定することを禁止する。
- ・名誉会員の身分の存続期間を理事会で決定できる。
- ・会費を所定の期日に納入しない場合も、会員身分の終結は理事会の裁量とする。
- ・クラブの区域限界という概念を廃止し、「所在地域」とする。
- ・サイバー・クラブを20クラブを限度として認める試験的プロジェクトを許可する。
- ・ワールドワイド・ウェブにRIのサイトを開設し維持すること。
- ・ガバナーの任務を改定し、地区リーダーシップ・プラン(DLP)の参加を奨励する。
- ・RI会長および会長エレクトに対して、毎年感謝の意の表明として理事会が定める一定額の金銭の支払いを認め、「事務総長が報酬を受ける唯一の役員である」とする規定から「唯一」という文言を削除した。

2004年シカゴ規定審議会

- ・相丘参加型のウェブ会合に30分間参加した場合には例会出席と認める。
- ・ロータリー親睦活動への出席を例会川席と認める。
- ・転勤による長期欠席の場合、所屬クラブと転勤先の指定クラブとの合意があれば、転勤先の指定クラブの例会への出席を所属クラブへの例会出席と認める。
- ・試験的プロジェクトの時間制限を5年間から6年間に延長する。
- ・クラブの合併を認めることにした。
- ・クラブの所在地域から移転する正会員が会員身分に伴うすべての条件を満たしている場合は、理事会の承認によりその会員身分を維持できる。
- ・移籍会員または元クラブ会員は、既にその職業分類が充填されている場

合でも正会員に選出できる。

- ・ RI の第 2 標語の「He profits most who serves best」を「They profit most who serve best」とする。

- ・ ロータリーにおいて歴史的に重要な声明や文書の原文の用語を保存することを考慮する。

- ・ クラブ提出の立法案は、地区大会の票決または郵便投票による承認を要する。

- ・ RI 会長および会長エレクトに対する感謝の意の表明名目での金銭の支払を廃止し、事務総長を報酬を受ける「唯一の」役員と再確認した。

2005.8.12

ポール・ハリスと家族

ポール・ハリス Paul Harris の父方の先祖はスコットランド出身であり、ハリスという名前はノルマンディ出身のヘンリーから変化したものだとされています。イングランドではハリスン Harrison、ウエールズではハリース Harries、スコットランドではハリス Harris が多く使われているようです。バージニア州のハリスバーグという地名はヨークシャー出身者に因んでつけられたもので、ヨークシャーはスコットランドと深い関係があります。

ポールの父方の祖父に当たるハワード・ハリスは、バーモント州ウォーリングフォードで農園を営んでいる資産家で、祖母のパメラは同じくウォーリングフォードの実業家ジェームス・ラスチンの娘でした。二人とも、ニューイングランドの典型的な敬虔な正教徒であり、ハワードは背が高く、体格のいい体格でしたが、パメラは体重 89 ポンドと小柄な女性でした。

なお、現在は、「ポール・ハリス記念館」としてウォーリングフォード・ロータリークラブが例会場として使用している、ポールが通った「小さな赤い屋根の小学校」は、このジェームス・ラスチンが 1818 年に建てたものです。ハワードとパメラには一男四女の子供がいましたが、一人息子のジョージがポールの父親にあたります。三人の娘は早死にしましたが末娘のパメラは、ウエスト・ラトランドの医師、ジョージ・フォックスと結婚し、後にポールは、フォックス医師の下に身を寄せて、ここから高校に通いました。多感な少年時代の一時期をここで暮らしたことから、彼の人格形成にフォックス医師の影響を大きく受けたものと思われます。ポールが少年時代によく泳ぎに行ったフォックス池は、ジョージの弟ウィリアム・フォックスの持ち物でした。

ポールの母方の先祖はアイルランドからマサチューセッツに渡ってきた移民で、元来オブライエンという名前でしたが、後にブライアンと改名します。ポールの母方の曾祖父はニューヨーク州西部開拓者の草分け的存在であるリュース・ブライアンであり、その子供が祖父ヘンリー・ブライアンです。ヘンリーはシカゴで弁護士を開業していましたが、ゴールド・ラッシュに人生を賭けて、49人の仲間を引き連れて、カリフォルニアへ金鉱探しにでかけ、全財産をそれに投入しましたが、それに失敗して、ラシーンに戻りました。ラシーンは当時急速に発展した町であり、ヘンリー・ブライアンはかつてシカゴで弁護士をしていたという経歴をかわれて2代目の市長に就任しましたが、金銭的にはかなり苦しかった模様です。

ポールの両親や祖父母に関する記録は、ポール自身の自伝に拠るところが多く、その中では父方の祖父ハワードと祖母パメラの事だけしか触れていませんので、母方の祖父ヘンリー・ブライアンの影響については、あまり知られていないようですが、ポールは、性格的にはヘンリーにそっくりであることから、後にシカゴで弁護士を開業したのも、サンフランシスコに二番目のロータリークラブを拡大したのも、この祖父ヘンリーがシカゴの弁護士であり、かつサンフランシスコで受けた大きな打撃に対する報復であると、うがった見方をする向きもあります。

このヘンリー・ブライアンの8番目の娘、コーネリアがポールの母親です。父方の祖父ハワード・ハリスは、息子のジョージと嫁のコーネリアのために、ラシーンにドラッグ・ストアと一戸建ての居宅を買い与えていますし、コーネリアの実家にもかなりの金銭的援助をしています。

ポールはジョージとコーネリアの第二子として、ラシーン市5番街316番地の家で生まれましたが、この家は1956年にホテル建設のためにとり壊されました。現在はこの場所にはラシーン銀行が建っています。

ジョージはあまりにも豊かな才能を持っていたため、売れもせぬ小説を

書き続けたり、発明にうつつを抜かす生活を続けたため、健全にドラッグ・ストアを経営することができませんでした。コーネリアも金銭感覚にうとく、その日の糧に困っても、メイドを雇うのが当然だと考える性格でした。そしてピンチが訪れるたびにハワードに助けを求めるという日常生活を繰り返していましたが、ついにそういった生活にも限界がきて、一家離散という破局を迎えることになりました。

1871年7月、5歳の兄セシルと3歳のポールは、父ジョージと共に、ミルウォーキーに向かい、そこから汽船と汽車を乗り継いで、バーモント州ウォーリングフォードに向かい、祖父ハワードに預けられることとなります。コーネリアは、持ち前の自尊心の高さから、舅の世話になることを拒否して、生まれたばかりの妹、ニーナ・メイと共にラシーンに留まって、ピアノを教える生活の足しにする道を選びます。

ポールとセシルが何年間このウォーリングフォードで生活したのかは判りませんが、父親がやっと定職に就くことができたので、ニューヨーク州東部のケンブリッジで、再び家族と一緒に暮らすようになりますが、ふたたびポールはウォーリングフォードに戻されることとなります。

しばらく経ってから、再度、ハワードがジョージにドラッグストアと家を買って与えたことから、家族一緒に、バーモント州西部のフェアヘイブンで暮らすこととなりますが、2-3年後には元の木阿弥となり、ジョージは発明に熱中して一家離散が繰り返されました。これを最後に、ポールは三度、祖父ハワードに引き取られて、それ以降、両親や兄弟と一緒に暮らしたという記録はありません。或る晴れた日に、美しく着飾った母と妹がウォーリングフォードを訪れて、ポールにすずらんの花束を贈ったと言うのが、母親に関する唯一の思い出であり、それ以降は両親に関して全く触れていませんし、事実、その後は両親との接触は全く無かった模様です。

ポールがアイオワ州立大学に入学する前、デモインのシェルドン大理石商会で外交員として働いた際、一緒に働くように誘ったのは兄のセシルでしたし、ロータリーが創立された後は、国際ロータリーの事務局の職員を務めました。若くしてこの世を去りました。

ポールが両親と別れた後、フェアヘイブンで3人の弟が生まれていますが、一番上の弟は夭折し、二番目の弟は米西戦争でフィリピンで戦死しました。

一番下の弟レジナルドは数奇な人生を歩みます。国際ライオンズの文献によれば、1905年2月23日、ロータリーの最初の会合が開かれた際、その場所にレジナルドが同席しており、ロータリー最初の会合は4人ではなく5人であったと記載されています。その後レジナルドはララミー・ロータリークラブの副会長を経て、国際ロータリーの事務局に務めますが、1930年に国際ライオンズに移り、カリフォルニアやネバダのロータリー組織に壊滅的打撃を与えます。ポールが逝去する5日前、1947年1月22日付の、ポールがレジナルドに出した手紙が残っていますが、その宛先は、国際ライオンズ事務局気付けとなっています。

ポールは生涯に亘って両親からの愛情に恵まれなかったばかりか、祖父母も両親に代わってポールに愛情を注ぐには、余りにも年を取り過ぎていました。ポールが3歳で預けられた時、祖父ハワードは既に72歳という高齢だったのです。その結果かどうかはわかりませんが、自分の意に副わないという理由で、敢えてポールを遺産相続人から外すという措置を講じたため、折角通っていたプリンストン大学を途中で断念せざるを得ませんでした。その一方で、自分を見捨てた父親や末娘には遺産を残すという不公平さに対して抗議をする意味からか、祖母パメラの葬儀の際にもウォーリングフォードには足を向けませんでした。

ポールはスコットランド、エジンバラ出身のジェーンと結婚しますが、

子宝に恵まれませんでした。二人の仲がどうであったかは知る由もありませんが、ポールに対する弔辞の中でジーンが述べた「知っているようで、知らない人」という冷ややかな言葉や、ジーンがポールと一緒に葬られることを嫌って、4000 マイルも離れたエジンバラに別の墓所に作ったことから、仲睦ましい家庭生活を送ったとは思われず、生涯を通じて家族の愛に恵まれた生活を送ることが適わなかったことだけは確かなようです。

2005.8.19

社交クラブとしての出発

共通の趣味や興味を持つ仲間が集まって作る団体のことをクラブと呼んでいます。クラブはイギリスで発祥したと言われており、特定の大学の同窓生、特定のスポーツ団体、軍隊の仲間を中心に作られた親睦団体がその起源です。特定の政治的思想を持った人たちの集まりのことを「政党」と呼んでいますが、これもクラブの一種です。先日来、郵政民営化を巡って、自由民主党内で争いが続いています。異なった政治的思想を持つ勢力が同じ政党内に存在することは、クラブの定義上ありえないことなのです。

懇親のための場所を持ち、人と会ったり、飲食をしたりする社交の場のことを社交クラブと呼んでいます。ロンドンの繁華街をさまよっていると、路地のつきあたりに地下に降りる石造りの階段があり、その奥に分厚い樫の木のドアがあります。そのドアをコツコツと叩くと、ドアの視線の高さに付いている小窓が開いて、もしもあなたがそのクラブの会員ならば、おもむろにドアが開いて、中に招き入れてくれます。こんな場所が社交クラブの原型です。イギリスの社交クラブは伝統的に男性中心であり、女性の立ち入りを受け付けないケースが多いようです。

宗教的な迫害や経済的な事情から祖国を捨てて、新大陸に移住してきた人々も、いろいろな理由をつけてこういった社交クラブの伝統を受け継いで、くつろぎの場所を作ったことは、容易に想像できます。

ポール・ハリスが殺伐とした大都会の中で、心から語り合える友を求めて、ロータリークラブを作りましたが、このロータリークラブも当時星の数ほどあった社交クラブの一種であって、決して独創的な設立作業ではありませんでした。彼は当時すでに、シカゴ・プレスクラブ、プレーリークラブなどの幾つかのクラブに入っており、その延長線上にロータリークラブを設立したに過ぎません。ポールがその中の幾つのクラブに入っていた

のかは判りませんが、当時、全米各地には数え切れないほどのクラブが出来ては潰れていったことは間違いありません。

シカゴ・ロータリークラブもいつ潰れてもおかしくない状況で設立され、極めて危険な綱渡りをしながら、細々と生き長らえていったのです。親睦に加えて会員同士の物質的相互扶助に大きなメリットがあったため、徐々に会員数を増やしていったものの、クラブの運営は極めていい加減なものであり、その証拠に、シカゴクラブ創立後 5 年間の記録はほとんど残っておらず、正式な記録は全米ロータリークラブ連合会が設立された 1910 年以降のものしかありません。

拡大作業も、新たに一から作ったのではなく、既存クラブを単に名義変更したケースも数多く見受けられます。ミネアポリスでは、すでに一人一業種制度を採用したパブリシティ・クラブが創立されており、その組織がそっくりそのまま、ロータリークラブに名前を変えたというのが真相です。ロスアンゼルスではハーバート・クィックが、株式会社として全米ロータリークラブという組織を作っており、これが後発のロスアンゼルス・ロータリークラブに吸収されたのは 1912 年のことでした。

イギリスでは、正式な拡大作業が始まる前に、元サンフランシスコ・ロータリークラブ会員スチュワート・モローが、個人的に、ダブリンとベルファストにロータリークラブを設立しましたが、会員一人当たり 1 ポンドの手数料を取っていたことが露見するという事件が起きました。この二つのケースは、ロータリーが急速に広がっていったことを見た、利に聡い人たちが、これを商売に利用したもので、何でも金儲けの手段に利用しようという当時の状況がよく判ります。

当時数多くの社交クラブが生まれては潰れていったのに、なぜ、ロータリークラブを始めとした、ライオンズクラブ、キワニスクラブなどの奉仕クラブだけが今日まで生き延びたのでしょうか。もしもこれらのクラブが

当初かかげた会員の親睦のみを目的とした社交クラブの域に留まっていたとしたら、きっとその寿命は10年ともたなかったことでしょう。他の奉仕クラブのことは別にして、もしも、1906年に、ドナルド・カーターが対社会的奉仕活動という概念を提唱しなかったとしたら、1908年に、アーサー・シェルドンが職業奉仕という概念を提唱しなかったとしたら、1923年に、ウイル・メーニアやポール・ウエストバークが決議 23-34 によって奉仕理念と奉仕活動の実践とを調和させなかったとしたら、今日のロータリーがないことは間違いありません。ロータリークラブの目的を、利己を目的とする親睦や相互扶助から、他人の事を思い遣り他人のために尽くす奉仕に転換させたことが、ロータリーの発展に繋がったのです。

さらに、ロータリー運動が創立者のインスピレーションに捉われることなく、毎年指導者が交替するという斬新な運営方法を採用したこともロータリーが発展した大きなファクターの一つです。

現在のロータリーの綱領や定款の中には、どこを探しても「親睦」の文字を見つけることはできませんし、社交クラブの面影は残っていません。しかし、ロータリー運動の目的から「親睦」は消え去ったとしても、ロータリー運動の前提として、「親睦」は欠かすことのできないファクターであることは、間違いのない事実です。時代と共に、ロータリー運動がどのように変化していこうとも、ロータリーが親睦を目的とした社交クラブとして出発したという事実は、すべてのロータリアンの遺伝子の中に深く刻み込まれているのです。

2005.8.26

エバンストン帝国

規定審議会などの正式な立法機関に諮ることなく、重要な案件を RI 理事会が勝手に決定してしまう風潮を、1967 年の「杞憂論争」の中で、直木太一郎 PDG は、「エバンストン帝国」と表現しましたが、最近はとみにその傾向が強まっているように感じます。これは、RI 本部がアメリカのシカゴ郊外のエバンストンにあり、20 名の理事役員の内の 7 名がアメリカ人であり、事務職員のほとんど全員がアメリカ人であることから、グローバル・スタンダードで管理されるべき RI 理事会が、アメリカン・スタンダードで管理されている結果であろうと推察されます。

1933 年にシカゴ・クラブで行われたアンケートでは、共和党の支持者が 72.59%、民主党の支持者が 8.64%という結果がでており、当時のロータリークラブの会員のほとんどは共和党支持者で占められていました。さらに、現在のジョージ・ブッシュを含めた歴代のアメリカ大統領は 2-3 名の例外を含めてほとんど全員がロータリアンであることから、その傾向は現在も続いているようです。その共和党も、現在は、ネオ・コンサーブティヴス(ネオコン)と呼ばれる人たちによって大きな影響を受けており、その影響が、共和党の牙城でもあるアメリカのロータリークラブに大きな影響を与えているものと思われます。

ロータリーには二つの奉仕理念があります。その一つは **Service above self** という、他人のことを思いやり他人のために尽くすという社会奉仕の理念であり、もう一つは **He profits most who serves best** という、他人に対して大きな奉仕をすれば、自らも大きな利益が得られるという職業奉仕の理念です。この二つの奉仕理念を備えていることがロータリーの特徴であって、その何れが欠けても、ロータリー運動は成立しません。

社会奉仕に関する 1923 年の声明(決議 23-34)には「ロータリーは基本的

には一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだに常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は奉仕— **Service above self** の哲学であり、**He profits most who serves best** という実践倫理の原理に基づくものである。」と記載されていましたが、2001年および2004年の手続要覧の「決議 23-34」には、**He profits most who serves best** という実践倫理の原理に基づくものである。」という文章が削除されて、現在に至っていません。これは、2001年の規定審議会の決議 01-678に基づいて、RI 理事会が第二モットーの使用停止をしたことによるものだと思いますが、国際大会や規定審議会で正式に決定した決議を理事会が勝手に変更することはできません。

決議 23-34 の最後の部分に (26-6,36-15,51-9,66-49) という記載がありますが、これは何れもこの年度の国際大会の議を経て変更された番号を表したものであり、今回のように規定審議会の議を経ずに、勝手に大切な決議を変更して、それを手続要覧に記載することは理事会の越権行為と言わざるをえません。

特に決議 23-34 は、ロータリーの奉仕哲学と実践理論の原理を定義している極めて重要なドキュメントであり、この決議から **He profits most who serves best** という大切なロータリーの奉仕理念を削除してしまえば、ロータリーの理念、特に職業奉仕理念を正しく説明することは不可能になります。He が使われているという理由だけで、このようなロータリーの根幹を揺るがすような重大な変更が、規定審議会の議を経ずして、RI 理事会の独断でされることは由々しきことであり、ロータリーの将来に大きな不安を感じます。

2004年規定審議会では40件の決議案が採択されました。その大部分はRI理事会に実施方を要請する案件でしたが、規定審議会で採択されたにもかかわらず、理事会がその実行を拒否した案件が17件にのぼりました。その主なものは次の通りです。

1. 地区大会における会長代理制度を撤廃する・・・地区大会への会長代理の訪問が必要かどうか各地区が決めることには同意できない。
2. 地区大会の期間を一日以上3日以下にする・・・現行の地区大会の方針は、柔軟性を許容しているので、これ以上の措置を講ずることには同意しない。
3. ロータリーにおいて、歴史的に重要な声明や文書の原文の用語を保存する・・・時には、現在のRIの特徴を反映させるために歴史的な声明や文書の用語を若干変更することが必要である。従ってこれ以上の措置を講じない。
4. エイズ孤児の養護のためのマッチング・グラントの建設規制を緩和する・・・財団は、個人が生活したり、仕事をしたりする、あらゆる種類の建物を建設するための資金に充当することを停止しているため、この規則を緩和しない。

これ以外にも、規定審議会で採択された数多くの決議案が、RI理事会によって拒否されていますが、これでは何のために規定審議会を開催して、多くの労力を費やしながら討論するのか分かりません。すべての事柄がRI理事会の考え通りに進められるのなら、規定審議会の存在そのものが否定されることになります。

ロータリーはピラミッド型の構造ではありません。「最初にクラブありき」だったはずで、何よりもクラブの自治権が優先されなければなりません。RI理事会が示すものは命令ではなく、単なる要請なり勧告に過ぎないので

す。

最近、RI 理事会が積極的に推進しているものに、クラブ・リーダーシップ・プランがあります。慇懃に、「単なる要請に過ぎない」と断っていますが、これを採用しなければ今にもクラブが機能を喪失してしまうとでも言わんばかりの強引な推奨ぶりです。

機能を喪失した小クラブが、ボランティア組織として生き残るためには、有効な方法かも知れませんが、この考え方の中には、ロータリーが他の奉仕団体と一線を劃した職業奉仕の理念はどこにも見当たりません。今にも潰れかかっているクラブに何故、ロータリー財団委員会や広報委員会が必要なのか、理解に苦しむところです。立派に四大奉仕に基づいた奉仕活動を実践しているクラブにとっては、何のメリットもない委員会構成であり、少なくとも日本国内に於いて、クラブ・リーダーシップ・プランに基づいた委員会構成を採用しなければならないクラブは皆無に近いと言わざるを得ません。リーダーシップの研修の必要性を説きながら、それを担当する委員会を常任委員会から外すという発想にも大きな矛盾を感じます。

何れにせよ、委員会構成を含むクラブ管理運営は、クラブ自治権の範疇にあることを考えて、RI 理事会の干渉を排除する毅然たる態度が必要です。

2005.10.1

50年前のロータリー(クラブ管理)

今から50年前、1955年版の手續要覧から、現在のロータリーと50年前のロータリーにおけるクラブ管理の違いを比較してみたいと思います。欠席した会員は、直前6日から直後6日の間にメイクアップをしなければなりません、原則として出席したクラブの幹事はその旨を報告しなければなりません。現在もメイクアップ・カードが郵送されてくるのは、この当時の名残ですが、もし幹事が連絡しなければ本人が電信又は書面によって報告しても良いことになっています。

現在は、幹事がメイクアップした会員の所属するクラブに報告する義務はなく、メイクアップをした会員の申告によってメイクアップは成立します。

クラブ会員が国際ロータリーの役員、ガバナー、ガバナーの特別代表、或は国際ロータリーの用務に従事するために、所属クラブの例会を欠席した場合は、本人より書面を以て所属幹事に報告すれば出席とみなされます。現在は、書面による提出は必要ありません。

すべての会員が、国際ロータリー大会、地域大会、地区大会、地区協議会、又は正式に発表されたロータリークラブの都市連合会に出席した場合は、その旨の証明を本人より所属クラブへ捷出すれば出席とみなされます。これも現在は口頭による申告でメイクアップが成立します。

応召会員には次のような規定があります。国家の危急時に際して軍隊或はその他政府の公用に動員された会員を有るクラブは、理事会の意見として次のような処置をとることが出来る。

会員であって、全時間公用に従事し例会に出席出来ないものは、その人がそのクラブの会員たることを続け、且つクラブがその例会欠席を承認してその会員資格を継続させる限り、例会に出席したものとみなしてもよい。

別の言葉で云えば、クラブがもし欲するならば、応召会員に対して、国家の危急時の間、出席と認めて賜暇を与えても良いということになります。クラブの便宜のために「公用」とは何を指すかについて、一般的な定義を次のように下しています。

- (1) 軍隊に於いて現役兵としての勤務。
- (2) 政府及び地方庁に全時間勤務。

ここに述べた「応召会員」に関する説明は、「国家の危急時に放ける」軍務及び公用にのみ特に適用するものであり、その他の場合の軍務・公用には適用しないものと理事会では考えているようです。

すなわち、応召中の会員に対しては長期間の賜暇が与えられていましたが、それは、「国家の危急時」に限定されており、平時においては、一般の会員と同様な出席義務が課せられていたわけですが、RI 復帰前後の東京クラブがアメリカ軍人で賑わった裏にも、こう言った事情があるのかも知れません。なお、この規約がいつまで残っていたかは不明です。

最近では CLP の導入によって委員会活動の継続性が強調されていますが、当時は役員留任は推奨されてはいませんでした。クラブ役員は、1年の任期で、代るがわる順番に就任するのが原則であり、連続して同一の職に就かないことが奨励されていました。

ただクラブ幹事だけは例外であり、長期間留任したり、反復して勤める例も数多くみられました。

役員留任の順序については、次のような取り決めがありました。

- (1) 委員長の経験のあるものがクラブ理事となる。
- (2) クラブ理事或はクラブ幹事の経験のあるものがクラブ会長となる。
- (3) クラブ会長或はクラブ幹事の経験のあるものが地区ガバナーとなる。
- (4) 地区ガバナーの経験のあるものが国際ロータリー理事となる。
- (5) 国際ロータリー理事の経験あるものが、国際ロータリー会長となる。

当時は、幹事候補者として入会してもらったのに、委員長に就任していなかったために幹事になれなかったり、長老の会員に会長を依頼したら、今まで一度も委員長の経験がなかったなどという話をよく聞いたものでした。なお、会長と幹事が共にクラブの代表者であることから、幹事を経験しただけでガバナーになった方もかなりいたようです。

当時は居住地で入会することができず、クラブのテリトリー内でクラブから貸与された職業分類で事業又は専門的職業に、現に、自ら、従事している者に限られていました。当時の理事会は、クラブの地域内に住所を持っている人に会員資格を与えるように、国際ロータリ一定款を改正する意図はいささかもないと述べています。

住宅地にクラブを作るために、郊外電車の社長が、居住地の駅を事業所にしたり、急遽、自宅の玄関に会社の支店の看板を掲げたりしたという話も残っています。

2005.10.1

Service, not self の真意

今年度の RI のテーマが **Service above self** であることから、このテーマの原型とされている **Service, not self** の真意を紹介するために、予めから翻訳していた、ベンジャミン・フランク・コリンズの「**How it is done in Minneapolis**」というスピーチ原稿を公開して、その中で述べられている **Service, not self** という言葉を紹介しました。その **Service, not self** という言葉の解釈が今まで伝えられてきた解釈とはまったく違うために、戸惑いと混乱が起こっているようですので、事の顛末を整理してみたいと思います。

日本におけるロータリーの過去の指導者たちの大きな過ちの一つは、思想や理念や出来事を当事者が直接書き綴った一次文献を読むことを怠って、後世の誰かが訳して解説を加えた二次乃至は数次文献や、ひどい例では誰かが書いた文章や、語った言葉を、さも自分の意見のように説いてきたことにあります。私たちが学術論文を書く場合には、必ず参考文献を記載した上で引用するのが常識でしたが、ロータリーではそれさえ守られないのが通例でした。他人の説を人に語るときには、必ず出典を明らかにする必要があります。その出典が二次資料ならば、一次資料にさかのぼって、その内容が正確かどうかを調べた上でなければ、人に語る資格はありません。

「**Service, not self**」の解釈を巡る今回の混乱の元凶は **Oren Arnold** が書いた「**Golden Strand**」という本にもあります。この本にはフランク・コリンズの職業を弁護士と書いてありますが実際には果物卸売商です。また、「この演説はアーサー・シェルドンの有名な宣言 **He profits most who serves best** を最初に聞いてから、僅か数分以内になされたものであった。」と記載されていますが、実際はシェルドンの原稿が読み上げられた前日、

1911年8月22日に行われたコロンビア川をさかのぼる船旅における即興演説です。

さて、Service, not self という言葉の持つ意味について、「Golden Strand」は次のように記述しています。

Service, not self そう、何れにせよ、自己の存在を考えることが、まったく悪いわけではない。例えば、人間は自尊心を持つべきだし、自分自身を守らなければならない。もし自分自身が零落すれば、奉仕することなどできるわけではない。従って、Not Self が、何を意味しているかを理解することは、まったく難解である。自分自身を二の次にしておくのは良いとしても、それを完全に否定するのはどうかと思われた。「よし、それなら Service Above Self にしたらどうだろうか？」 誰かが意気揚々と、適切な提案をした。「それは良いね！」 別の人が叫んだ。たぶんそれは、販売の専門家アーサー・シェルドンの興奮した声であつたに違いない。「それはよい方針であり、すべてを言い尽くしている。」 明らかに、彼の発言は正しく、その提案は満場一致をもって採択された。

この本には、Service, not self は自己を完全に否定した考え方であると述べていますが、コリンズのスピーチの内容は決してそのようなものではありませんし、Service above self に変えたのはシェルドンかも知れないと言っていますが、それを証明する資料は残っていません。

このように、「Golden Strand」に記載されている Service, not self に関する一連の記載を読むと、この作者はひょっとしたらフランク・コリンズのスピーチ原稿を読まずに、伝聞によって得た知識を記載したのではないかと思われるふしが各所に見られます。この本は初期ロータリーを知るための読み物としては非常に良い本である一方、ロータリー史の教科書としては問題の多い本だといえます。

日本の過去の指導者たちのほとんどは、この「Golden Strand」を利用してロータリーを説いてきたという経緯があります。特に千種会という団体では、「ロータリー発生史」の内容はこの「Golden Strand」がそっくりそのまま語られています。私が研究用資料として1998年に「Golden Strand」の邦訳をした際、この事実に気づきびっくりいたしました。なお、かつては私もこの千種会に属していた関係上、私が収集した、このコリンズのスピーチ原稿を始め、1910年、1911年、1913年のシェルドンのスピーチ原稿、シカゴ大学のRotary?、ビビアン・カーターのThe meaning of Rotaryなどの貴重な一次文献のすべてを千種会に提供しましたが、それらが活用されることなく現在に至っていることを申し添えます。

さて、Service, not selfという言葉が説明されているフランク・コリンズの「How it is done in Minneapolis」というスピーチ原稿は、1911年11月の発行された「The National Rotarian Vol. II、No.1」に収められており、私が2002年1月にOne Rotary Centerの資料室で見つけ出して翻訳したものが、多分、本邦初公開ではないかと思われまます。

Service, not selfを解説するに当たっても、殆どの人はコリンズのスピーチ原稿の存在を知らずに、従ってコリンズのスピーチ原稿を読まずに、「Golden Strand」の内容をそのまま語るものですから、みな一様に「コリンズの職業は弁護士。Service, not selfとは自己を完全に否定した高次元の考え方。Service, not selfをService above selfに変えたのはシェルドン。」だと説いてきたわけです。

ちょうど、伝言ゲームで途中の一人が間違えると、最後にはほとんどない結論に至るのと同じです。ゲームならばともかく、ロータリーの理念を伝えようとするならば、伝聞に頼らずに、必ず一次文献までフィードバックして確かめる努力が必要です。

「Golden Strand」に記載されている内容を、その出典を明らかにした上でそのまま紹介するのならばまだご愛嬌ですが、一次文献の存在を知ってか知らずか、自分の思い込みから、これを高い宗教的次元のモットーだと間違っ了解説をすると、この言葉がとんでもない方向に迷走していく結果になります。

百年一日の如く、語り部によって語り継がれてきたロータリーの歴史や理念も、情報の収集と解析能力が進むことによって、数多くの新しい再発見が加わってきます。こういった新しい発見に科学的な検証を加えて、間違っ語り継がれてきた事柄にどんどん修正を加えていかなければ、ロータリーの進歩はありません。

或る指導的な立場にあるロータリアンは、未だにコリンズは弁護士であり、**Service, not self** は中世キリスト教神学の思想以外の何者でもない優れた宗教的色彩の強いモットーであって、自分を否定して、宇宙を支配する神の秩序体系に帰依することであると述べていますが、コリンズは自らのスピーチで、自分の職業は果物卸売商であると述べており、さらに、彼の原稿からは、宗教的な高邁な思想を感じとることはできません。

以下、このスピーチ原稿の内容の概略を紹介します。

ロータリークラブの組織では、なすべきことはただ一つであり、それを正しく始めなければなりません。正しく始めるためには、ただ一つの方法しかありません。自らの利益が得られるかもしれないと思ってロータリーに入ってくる人たちは、間違っ部類の人たちです。それはロータリーではありません。ミネアポリス・クラブによって採用され、当初から定着している原則は **Service, not self** です。

「利他のためにロータリーに入るべきであり、その原則をミネアポリス・クラブでは **Service, not self** という言葉で表している」という説明で

あり、入会の動機を戒めるこの言葉の中に高い宗教的な要素が含まれているとは感じ取られません。

○	月に1回ではなく、毎週1回の例会を開催している。
○	外部からの卓話者を呼ばずに会員が実施している。
○	友愛委員会の活動として、昼食例会のチケットを会員の事業所で発売し、会員がそれを買うに行くことによって会員間の人間関係を緊密にすることができし、新入会員の世話をしたり、会員から提供された食品を集めてディナー会を開催する活動を実施している。
○	ロータリアン同士の相互取引が原則であるが、ロータリアンの店だけの取引では限界があるので、積極的にロータリアン外の人とも取引をすべきである。
○	他の会員との相互扶助も大切である。ロータリアンの紹介によって大きな取引ができた不動産業者の実例。
○	ミネアポリス・クラブの会員同士の友情は素晴らしい。何か困ったことがあれば、ミネアポリス・クラブに行きなさい。ミネアポリス・クラブを象徴する言葉こそ、 Service, not self である。

以上の内容が、コリンズが語ったスピーチ原稿のあらましです。

この中から、強い宗教的色彩も、中世キリスト教神学の思想を感じ取れるはずありません。クラブ会員の親睦の大切さを説き、さらにロータリアン同士の物質的相互扶助の大切さを説きながら、ロータリアン以外の人たちとの取引も勧めるという矛盾に満ちた内容であり、なぜ、**Service, not self** がミネアポリス・クラブに定着している原則なのかが理解できません。

強いてこじつけた解釈をすれば、今まで、会員同士で行ってきた物質的相互扶助を、会員外に広げることによって、それを利他の心と説いたのかも知れません。自らの利益だけを考えずに、他人に奉仕する意味で **Service, not self** という言葉を作ったとすれば、この言葉は職業奉仕のモットーである **He profits most who serves best** を補完する言葉であり、当時の年次大会の雰囲気から考えると、そう考えるのが当然かも知れません。

何れにせよ、**Service, not self** という言葉は、人道主義的活動を意味する言葉としてその後作られた **Service above self** とはまったく別次元の言葉だということは間違いありませんし、**Service, not self** が自己滅却という強い宗教的色彩を帯びた言葉であり、それを緩めた言葉が **Service above self** であるという解釈は間違った解釈です。なお、その **Service above self** という言葉が、何時、誰によって作られたのかは不明です。

1915年にガイ・ガンデカーによって書かれ、1916年の年次大会で参加者全員に配布された「**A talking knowledge of Rotary**」には、**He profits most who serves best** と共に **Service, not self** という言葉がそのまま引用されていますが、その内容はこれらの二つの言葉の解析ではなく、ガイ・ガンデカーのロータリー感が述べられているに過ぎません。

1921年の**The Rotarian**のコリンズの追悼記事には、**Service, not self** ではなく「コリンズが作った **Service above self** というモットー」という表現が使われているのは不思議なことです。

面白いことには、1921年の年次大会には、結果的に取り下げになったものの「現在ロータリー・モットーとして使われている **Service, not self**、**Service above self**、**Service before self** を廃止して **He profits most who serves best** のみにする」という提案がでていますから、当時はいろいろな思いを込めて、これらの言葉が渾然と使用されていたものと思われます。1923年には決議 23-34において、ロータリーの奉仕理念が確定し、ロー

タリーの哲学が **Service above self** に、実践倫理の原則が **He profits most who serves best** と定められ、1950年、決議 50-11 によってこの二つの言葉はロータリー・モットーとして正式に採択されるという経過をたどるわけです。

現在、**Service above self** は「超我の奉仕 他人のことを思いやり、他人のために尽くすこと」(チェスレー・ペリーの解釈)と訳されています。

さて、**Service, not self** の解釈がこのような結論に至ったことをよしとしない人たちは、私の翻訳が出所不明の怪しげな日本語訳であり、誤訳と誤解の連続であると主張しているようです。しかし、よくよくその主張を聞けば、問題は翻訳ではなく、今まで自分たちがさも本当らしく主張してきた話が、根本から崩れ去ることに対する恐怖や不安であるような気がします。

新しく発見された事実を事実として謙虚に受け止めることができないことは極めて残念なことです。日本人がディベートが不得意である原因として、自説を曲げたり、討論に負けることが、あたかも本人の人格が否定されたことと同じように受け止めることだと言われています。

私の翻訳が完全であると主張する気はありませんし、英語は私にとって難解この上ない外国語であることは間違いのない事実です。

完全な翻訳は存在しません。米語を日本語に翻訳する場合、ネイティブ・アメリカンでない限り、その言葉の持つ意味を 100%理解することは不可能ですし、日本人でその能力を持っている人は限られているはずです。ネイティブ・アメリカンに近い能力を持っていたとしても、それを日本語に置き換えようとするれば、さらに高い日本語能力が必要になりますし、日本語のような多くの言い回しがある言語では、翻訳者の主観によってその表現は大きく異なってきます。

原文の持つ意味を、例え直訳になってもいいからなるべく正確に伝えようという、RIの公式文献の翻訳が、まるで意味のわからない日本語になっているのも、そのあたりの事情を物語っているのではないのでしょうか。

私は、なるべく平易な日本語を目指して翻訳しているつもりですが、それに飽き足りない方は、是非、原文をお読みになることをお勧めします。私が翻訳した文献の原文は、すべて本ウェブ・サイトに収録していますのでご利用ください。

2005.11.6

ロータリーの綱領 新しい翻訳と解釈

炉辺談話 284 で「四つのテスト」の邦訳の問題点について、私見を述べさせていただきましたが、同じような翻訳上の問題点が「ロータリーの綱領」の邦文においても随所に認められるようです。

いろいろな人が翻訳上の問題点を指摘しておられますし、東大阪みどりロータリークラブでは「定款第 4 条問題検討委員会」を作って、本格的に邦訳の見直し作業をされているようです。

同クラブでは邦訳に当たって、いわゆる可算名詞と不可算名詞との使い分けにこだわっておられるようです。可算名詞はその名の通り数えることができる名詞で、単数形ならば a、an の冠詞がつき、複数形ならば s、es がつきますが、不可算名詞は冠詞をつけずに単数形で用い、その訳はかなり違ってきます。たとえば **fellowship** を可算名詞として使えば「団体・組織」となりますが、不可算名詞として使えば「親睦」となります。同クラブではその点から邦訳の間違いを指摘しているようです。日本人はかなり英語の得意な人でも可算、不可算を瞬時に区別できる人は少ないようで、従って冠詞のつけ方に苦勞するようです。ちょうど、日本人は何の苦勞もせずに「て、に、を、は」が使えるのに、外国人は苦手なのと同じです。しかし、比較言語学の専門家に聞くと、米語では可算名詞と不可算名詞の使い方がかなり混乱している模様なので、この点のみを重視して翻訳すると、いわゆる木を見て森を見ず的な翻訳になる可能性もあるようです。

定款を変更しようと思えば規定審議会の承認が必要になりますが、これは英文の正文を変更する場合であって、訳文の意味や解釈について疑義が生じた場合に、原文である英文にさかのぼって、意味が理解できるように翻訳しなおすことは、なんら問題はないと思います。

そこで、東大阪みどりロータリークラブがされた邦訳の見直し作業に倣って、私なりの解釈をご披露したいと思います。どうぞ皆様方も、自分の感性にぴったり合致する翻訳をして、この「ロータリーの目的」の本当の意味を十分理解してください。

主文

^①The Object of Rotary is to ^②encourage and foster ^③the ideal of service as ^④a basis of worthy enterprise and, ^⑤in particular, to encourage and foster:

① the Object of Rotary は国際ロータリー定款および標準ロータリークラブ定款の第4条において、ロータリーの目的を定めた最も重要なドキュメントであり、決して信条や綱領 Creed といった抽象的なものではありません。これを綱領と邦訳することによって、ロータリーの目的がはっきり理解できないロータリアンが生まれる大きな原因となっているのではないのでしょうか。the Object of Rotary の正しい邦訳は「ロータリーの目的」です。

② encourage を「鼓吹」と訳すことには時代錯誤を感じます。「奨励」の方が一般的で素直な訳です。

③ 米山梅吉は This Rotarian Age (邦題 ロータリーの理想と友愛)の邦訳に当たって、the ideal of service を「奉仕の理想」と訳しました。それ以来、日本のロータリーの世界では奉仕の理想という言葉が定着しているようですが、一般の人にとってはもちろんのこと、ロータリアンにとっても甚だ難解な言葉であることは間違いありません。service を「奉仕」と訳すこと自体いろいろと疑義があるところですが、この際、奉仕はそのまま置いて置くとしても、ideal はその語源から考えても理念と訳すほうが適切ではないのでしょうか。従って the ideal of service は「奉仕理念」と訳すほ

うが理解しやすいと思います。

- ④ a basis of worthy enterprise は素直に、「有益な企業活動の基本として」と訳したほうがきれいな文章になるのではないのでしょうか。
- ⑤ in particular はこの場合、「特に」ではなく、「詳細は」と訳すべきです。

以上の点を勘案してこの主文を邦訳すると次のようになります。

「ロータリーの目的は、有益な企業活動の基本として、奉仕理念を奨励し育成することである。その詳細は以下の項目を奨励し育成することである。」

付帯説明第 1 項

⑥
1. The development of acquaintance as an opportunity for service.
acquaintance という単語に関して、東大阪みどり RC は、この単語は不可算名詞なので「知り合い」という訳は間違いで「面識」と訳すべきだという見解です。

しかし、1927 年にイギリスの Vivian Carter が書いた The Meaning of Rotary の第 4 章 Acquaintance and Fellowship には、The development of acquaintance as an opportunity for service という節があり、acquaintance について次のように説明しています。「acquaintance という言葉は、通りや列車やバスの中や、クラブやレストランの中で偶然話し合ったり、会釈をしたり、微笑んだりする程度の、friend「友人」と stranger「見知らぬ人」との中間に属する、ちょっとだけ、または表面上だけ知っている人という使われ方をしている。」この文章を見る限り、acquaintance は「面識のある人」すなわち「知り合い」と訳するのが正しいのではないかと思います。

「心の友を得る」「親睦を深める」と説く人もいますが、それは間違いです。確かに初期の「ロータリーの目的」には The promotion of good

fellowship という文言があり「親睦を深める」ことが目的の一つでしたが、1918年からは The development of acquaintance 「知り合いを開拓する」ことになったのです。すなわちクラブの中で会員同士が親睦を深めるのではなくて、知り合いの人をどんどんロータリ運動の中に引き込んでいこうという意味なのです。

「1 奉仕の機会を得るために、知り合いを開拓すること」

付帯説明第2項

2. High ^⑦ ethical standards in business and professions; the recognition ^⑧ of the worthiness of all useful occupations; and the dignifying of each ^⑨ Rotarian's occupation as an opportunity to serve society ^⑩

⑩ an opportunity to serve society というフレーズは、単に⑨だけに係るのではなく、⑦⑧⑨に共に係ると考えるべきです。

⑦は事業および専門職務の高い倫理基準を保ち、⑧は世に有用なすべての職業の価値を認識し、⑨はロータリアン各自の職業を威厳あるものにすることを意味します。

ロータリー運動の中核となる職業奉仕を強調するために、毎回のように年次大会で修正が加えられ、最終的にこの文章に落ちついた模様です。

「2 社会に奉仕する機会を得るために、事業および専門職務の高い倫理基準を保ち、世に有用なすべての職業の価値を認識し、ロータリアン各自の職業を威厳あるものにする事」

付帯説明第3項

3. The application of the ideal of service in each Rotarian's personal, ^⑪ business, and community life

⑪ application は単なる適用ではなく「実践」と訳すべきでしょう。

ロータリー哲学は実践哲学ですから、行動が伴わなければなりません。例会を通じて奉仕理念を研鑽し、みずからの個人生活、職業生活、社会生活の場で、奉仕活動の実践に移さなければなりません。職業生活の場における実践が職業奉仕、社会生活の場における実践が社会奉仕および国際奉仕となります。

「3 個々のロータリアンが自らの個人生活、職業生活、社会生活において、奉仕理念を実践に移すこと」

付帯説明第 4 項

4. The advancement of international understanding, goodwill, and peace through a world fellowship of business and professional persons united in the ideal of service^⑫

⑫ a fellowship は可算名詞なので「団体・組織」を意味します。従って a world fellowship は世界的親交ではなく「世界的な組織」と訳すべきでしょう。

国際奉仕の実践に関しては、すでに付帯説明第 3 項の中で「社会生活」の中に含めて述べられているのですが、1921 年に初めてアメリカを離れてスコットランドのエジンバラで開催された年次大会を記念して、この条文が加えられました。

「4 奉仕理念に結ばれた、事業と専門職種の人たちの世界的な組織を通じて、国際理解と親善と平和を促進すること」

以上の点を勘案して国際ロータリーおよび標準ロータリークラブ定款第 4 条を翻訳しなおすと、次のようになります。現行の定款と比較してみてください。ずっと判りやすくなったはずです。

現行定款第 4 条

「綱領」

ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、特に次の各項を鼓吹育成することにある

1. 奉仕の機会として知り合いを広めること
2. 事業及び専門職務の道徳的水準を高めること。あらゆる有用な業務は尊重されるべきであるという認識を深めること。そしてロータリアン各自が、業務を通じて社会に奉仕するために、その業務を品位あらしめること
3. ロータリアンすべてが、その個人生活、事業生活および社会生活に、常に奉仕の理想を適用すること
4. 奉仕の理想に結ばれた、事業と専門業務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること

東大阪みどり RC 修正翻訳 定款第 4 条

「目的」

ロータリーの目的は、価値ある企業活動の基礎として奉仕の理念を奨励し育成すること、詳しくは、次の事項を奨励し育成することである

1. 奉仕の機会を得るときには、面識を深め人間関係を発展させること
2. 社会に奉仕する機会を得るときには、企業と専門職が有する高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、そして、ロータリアン各自の職業を尊厳あるものにする
3. ロータリアンの一人一人が、個人として、職業人として、地域社会の一員として、奉仕の理念を実地応用すること
4. 奉仕の理念に結ばれた実業家と専門家の世界的な団体を通して、国際理解、親善、平和を促進すること

田中修正翻訳 定款第4条

「目的」

ロータリーの目的は、有益な企業活動の基本として、奉仕理念を奨励し育成することである。その詳細は以下の項目を奨励し育成することである。

- 1 奉仕の機会を得るために、知り合いを開拓すること
- 2 社会に奉仕する機会を得るために、事業および専門職務の高い倫理基準を保ち、世に有用なすべての職業の価値を認識し、ロータリアン各自の職業を威厳あるものにする事
- 3 個々のロータリアンが自らの個人生活、職業生活、社会生活において、奉仕理念を実践に移すこと
- 4 奉仕理念に結ばれた、事業と専門職種の人たちの世界的な組織を通じて、国際理解と親善と平和を促進すること

2005.11.28

日本の常識は世界の非常識

1. 第一例会には国歌を歌う。例会場には国旗を掲げる。

戦争中、ロータリーは発祥の地がアメリカであることから、ロータリーはアメリカのスパイではないかと嫌疑をかけられたり、フリーメーソンの組織だという疑いをかけられました。その疑いを晴らすために、国に対して忠誠を誓うことを証明する意味で、例会で国歌を歌い、それが習慣化したものです。当時は、毎例会に特高が来て、サーベルをがちやつかせながら例会を監視したそうです。国旗も同様な理由で掲揚され、今日に至っております。アメリカ以外の外国では、殆どの国では、国旗を掲揚したり、国歌を斉唱するといった習慣はありません。アメリカは移民の集まりなので、アメリカ人であるという自覚を持たせるために、国旗掲揚と国歌斉唱が盛んです。

2. 例会ではロータリーソングを歌う

初期のシカゴ・クラブは会員同士の親睦と物質的相互扶助が盛んに行われていましたが、1907年にポール・ハリスは対社会的奉仕と拡大に活動方針を転換しました。さらに1908年に入会したアーサー・シェルドンは奉仕の必要性を強調したために、シカゴ・クラブは親睦・互惠派と奉仕・拡大派に分かれて、毎例会は激論の場と化しました。その刺々しい雰囲気や和らげるためにハリー・ラグルスが始めたのが、歌を歌うという習慣です。最初の頃は「Smiles」とか「My Hero」などの大衆的な歌が好んで歌われました。

日本では、例会や各種の会合が始まる前や閉会する前に、儀礼的にロータリーソングが歌われますが、本来はそのような歌い方をするのではなく、どんなタイミングで、どんな歌を歌おうと一向に構わないわけです。

3. 100%の出席率を目指す

日本の例会場には、ほぼ会員数に見合ったテーブルと椅子が用意されていますが、アメリカの大都会では必ずしもそうではありません。私はよく、マンハッタンにあるニューヨーク・クラブにメイクアップに行きますが、会員数 200 名のこのクラブの例会場には、幾ら数え直しても 100 脚ほどしか椅子が用意されていません。ゲストは通常 10 名程度で、殆どは外国のロータリアンで、近郊からメイクアップするロータリアンの姿を見ることは稀です。マンハッタンにはもう一つ、アッパー・マンハッタン・クラブがありますが、このクラブは黒人中心のクラブで、白人が行くことはほとんどありません。ニューヨーク近郊には小さなクラブが数多くありますが、これらのクラブにメイクアップする、近隣クラブのロータリアンの数はごく僅かです。この傾向は、シアトル、ロスアンゼルスといった大都会でもまったく同様です。

すなわちアメリカの大都会のクラブでは、例会に出席する会員は半数くらいしかなく、例会を欠席してもほとんどメイクアップをする人はいないので。ロータリーの出席規定を厳格に適用したら、半分くらいの人は退会を余儀なくされるのが、現在のアメリカの状況です。会員数が半減していないことは、出席規定が完全に空文化していることを意味しています。従って、クラブや個人が連続出席 100%を目指して努力する日本の姿は、彼らの目にはクレージーとしか写らないのでしょう。

4. ロータリーの会合は、点鐘で始まり、点鐘で終わる

日本では、あらゆるロータリーの会合は開会点鐘で始まり、閉会点鐘で終わります。これは地区大会であろうと、クラブ例会であろうと、まったく同じで、点鐘で始まり、点鐘で終わるのが当然だと思われていますから、点鐘を鳴らすのを忘れようものならば、まさに罰金ものです。

点鐘についてはどこにも取り決めはありませんが、外国ではどうしているのでしょうか。

私が参加した 10 回ほどの国際大会は、開会宣言で始まり、蛍の光で終わり、点鐘はありませんでした。

例会は、国やクラブによってかなり違いますが、点鐘を鳴らすのは珍しい部類にはいるのではないのでしょうか。ヨーロッパや東南アジアでは、何時始まって、何時終わるのか、さっぱり判らない例会も珍しくありません。

アメリカでは点鐘を鳴らすクラブもありますが、法廷やオークションで使う木の板を木槌でコンコンと鳴らす光景をよく見かけます。それも開会や閉会のときに儀礼的に鳴らすのではなく、スピーチを始める前などに注意を喚起するために使うことが多いようです。

5. 例会時間は 1 時間

日本では、例会時間は 1 時間と決めているクラブが多く、どんなことがあるとも、絶対に時間延長を認めないクラブもあります。卓話者に卓話時間を厳守するように事前に SAA が注意するクラブすらあります。

すべてのクラブは、クラブ細則に基づいて管理運営を行っていますが、推奨クラブ細則には例会曜日と例会開始時刻は定められているものの、例会時間や例会終了時刻に関する記載はありませんし、独自のクラブ細則を定めているクラブでも、それを定めているクラブにお目にかかったことはありません。すなわち例会時間が 1 時間であるという規約上の根拠はないことになります。アメリカの大都市のクラブは 1 時間半の例会が大部分です。地方の小都市のクラブでは 2 時間以上の例会や時間が不定期の例会も珍しくありません。韓国や台湾は日本の影響を受けて、1 時間の例会が主流ですが、その他のアジアの国やヨーロッパでは、何時終わるとも知れずに、延々と続く例会も珍しくありません。そんな長時間続く例会でも、途

中で退席する会員の姿は殆どなく、例会日は一日どっぴりとロータリー漬けになるつもりで、例会に参加しているように見受けられました。従って、彼らの目には、36分間経ったら我先に退席する日本のビジターや会員の姿は、さぞかし奇異に写るに違いありません。

6. 会費は食費を含めて支払う。

日本のほとんどのクラブの年会費には食費が含まれています。これらの費用は半期分を前払いすることになっていて、仮に例会を欠席したとしても食費を返してくれるクラブはほとんどありませんが、不思議なことには、これに文句を言う会員はほとんどいないようです。従って、クラブの会計にとっては、ホームクラブの例会に欠席することと、ビジターの来訪は大いに歓迎ということになります。

外国では会費の中に食費は含まれておらず、食事代金はその都度キャッシュで支払うか、食券を購入するのが普通です。レストランやホテルで行う例会では、幾つかのメニューが用意されていて、自由に選ぶこともできますし、食事抜きで例会に参加することも可能です。食費は大都会の大規模クラブでも15-20ドル、田舎に行くと7-8ドルが普通で、日本よりかなり安いようです。

東南アジアの開発途上国では、ビジター・フィー2-3ドルで、お茶とクッキーだけで例会を開催しているクラブもあります。

ビジター・フィーとして平気で3,000円、5,000円取る日本が、世界から見ると特殊な国であることを認識する必要があります。

7. クラブにはクラブ事務局があり、事務局員がいる。

RIが発行しているOfficial Directory(RI会員名簿)には、世界中のロータリークラブの情報が記載されています。2-3年前までは出版物として発

行されていましたが、現在は CD-Rom として発行されています。その会員名簿を調べると、会員 200-300 人以上の大規模クラブと、日本、韓国、台湾以外のクラブには、「クラブ事務局」の欄が空白であることに気がきます。これは決して記載漏れではなく、世界中のほとんどのクラブは「クラブ事務局」を持っていないことを意味するのです。

米山梅吉がロータリーという組織を日本に輸入した際、すでに社会的に成功した実業家で構成されたアメリカの大クラブを手本にしたことと、東京クラブが財界の大御所を中心に組織されたことから、会員が自らクラブを運営するのではなく、事務処理をすべて事務局員にさせるという悪い先例を作り、それを、その後設立された他のクラブが真似をし、さらに日本のクラブとして出発した韓国や台湾にもその悪い先例が引き継がれたものと思われまます。

大規模クラブは別にして、世界中のほとんどのクラブには、クラブ事務局はありませんし、事務職員もおりません。すべての事務処理は、幹事を中心にそれぞれのクラブ奉仕小委員会がこれを役割分担して行い、幹事の家がクラブ事務局を兼ねているのです。日本のクラブの会費が高いと不満を言う前に、その会費の半分以上を占めている事務所と事務職員の費用を節減する道を選ぶべきです。幹事、会計、出席委員会、親睦活動委員会、会報委員会などのクラブ奉仕関連小委員会が自らの役割を果たせば、事務局員は不要になるはずです。

9. クラブの個性

日本のクラブの委員会構成を見ると、ほとんどのクラブが同じような委員会構成を採用しています。中には、推奨ロータリクラブ細則と一言一句変わらない委員会構成を採用するように、カバナーが指導している地区もあるようです。旧推奨クラブ細則は会員 200 名程度のクラブを想定して作

られていたために、多くの委員会があり、30-40名程度のクラブでは一人の会員が幾つもの委員会を掛け持ちしなければなりません。新しい推奨細則ではかなり委員会の数を減らすことが可能になりましたが、今度は常任委員会や理事の定数を巡って混乱が起こっているようです。推奨細則の冒頭に「本細則は単に推奨されるに過ぎない。RI定款・細則、クラブ定款と矛盾しない限り、クラブ自身の事情によって変更することができる」と書いてあるにも関わらず、これに拘りすぎるクラブが依然として多いようです。クラブの委員会構成はクラブ細則で定めるために、クラブの自治権の範疇にあります。従ってどのように定めようとクラブの自由なのです。

外国のクラブや地区の委員会構成を見ると、実に個性に富んだ委員会が存在することが分かります。以下、その一例をご紹介します。

Fireman's Committee 火消し委員会 揉め事を解決する委員会

Donor Committee 臓器提供の斡旋をする委員会

Sunshine Committee クリスマスの贈り物をする委員会

History of Rotary Committee ロータリー史編纂委員会

Local trading Committee 市内における商取引を奨励する委員会

Business methods Committee 正しい事業運営を研究する委員会

皆様方のクラブを象徴するような、特徴的な委員会を作られては如何ですか。

10. ロータリーの会合に出席するときには身なりを整える。

日本のロータリアンはお行儀がよく、ほとんどのロータリアンは背広にネクタイ姿で、ロータリーのエンブレムをつけて会合に参加します。会社のユニフォームを着たままで例会に出席しようものなら、ひんしゅくの眼差しを浴びせられることは必至ですし、エンブレムでも付け忘れようものなら、罰金を免れることはできません。

定款・細則には、服装についての取り決めはどこにもなく、エンブレムについても使用する権利があると記載されているものの、それを付ける義務については何の規定もありません。

外国の例会では、背広にネクタイ姿の会員は半数以下です。皆、好き勝手な服装で、夏などは半袖がごく当たり前の格好です。特に女性会員の服装のルーズさは格別で、若いピチピチした肌ならば兎も角も、皺だらけの肌に、ノースリーブ、半パン姿には目をそむけたくります。この傾向は、国際大会などの大きな会合でも同様であり、最近では、Tシャツにジーンズ姿の参加者にも、あまり違和感を感じなくなったのも不思議なことです。

10 例会の卓話

日本では例会の開催時間を1時間と定める習慣が固定化してしまったために、1時間を越えるとまるで定款や細則に違反したかのような非難が集中するようです。その影響を受けて、どのクラブも、食事15分、クラブ議事15分、卓話30分と定めた、極めて硬直的な例会運営を強いられているようです。この時間の制約が、画一的で魅力のない例会が開催される大きな原因の一つになっているのではないのでしょうか。

私は、よくセミナーを依頼されますが、一つのテーマについて、相手が十分理解できるように話そうと思えば90分は必要になります。パワーポイントを使ってエッセンスを効率的に話しても最低限60分は必要です。

30分の卓話時間では荒筋を述べるだけで終わってしまい、聴衆の心をつよような話を期待することは不可能です。年間に1度回ってくるか、こないかの機会ですから、十分時間をかけて準備し、それを発表する機会が与えられるべきでしょう。

外国では卓話時間の定めはありませんが、およその時間を告知してから話を始めるケースが多いようです。話の途中に退席する人はほとんどいま

せんが、その一方で、話の内容がつまらなかつたり、面白くなければ、容赦なくブーイングを浴びせることや、冗長な卓話は強制的に終了させることすらあります。従って、卓話者は事前に十分準備をしてから、卓話に臨んでいるようです。

卓話が済むと、卓話の内容に関連した積極的に質疑応答が行われます。次々に質問攻めに会って、必死になって答える様は、卓話を聞くよりも面白く、卓話と質疑応答が一体となって、例会プログラムの中心になっていることを強く感じさせられました。

11 参加意識

外国では、例会を含めたすべての会合における出席率は極めて悪く、その平均は60%前後だと思われます。この実態を反映して、ロータリーの60%ルールが生まれたのではないかと思います。日本のように100%登録を強制して、実質的な出席者数は問わないといった手法は通用せず、登録者数と出席者数はほぼ同じです。

その代わり、出席した限りは、たとえ例会時間が2-3時間かかっても、途中退席する人の姿を見ることは稀です。これは、国際大会や地区大会や大規模の研修会でも同様で、初日の参加者も二日目以降の参加者もほぼ変わりはありません。万難を排して一旦出席したからには、最後まで参加しようという意識の強さを感じます。

日本ではどうでしょうか。食事とクラブの議事が済んで、これからいよいよ例会プログラムのメインである卓話に入ろうとする矢先に、ぞろぞろと列を作って退席するビジターの姿に、苦々しい思いをするのは私だけではないでしょう。どうしても席を外さなければならない急用が出来たのならばいざ知らず、前後2週間もあるメイクアップ期間中のわざわざ所用のある日を選んで、メイクアップをする必然性はないはずで

折角出席した例会です。最後まで参加することが義務であると共に礼儀であると考えべきでしょう。

昨年の大阪国際大会で、初日に、あの巨大な大阪ドームを埋め尽くしたロータリアンが、二日目以降にはアリーナにまばらにしか見当たりませんでした。どこで開催される国際大会でも、開会式にだけ出席して、後はほぼ全員が観光旅行に出かけてしまうのが、日本のロータリアンの現実の姿です。

12 SAA の権限

SAA はロータリーのあらゆる会合において、開門、閉門、会場の出入り、会場の案内、議事運営、食事など、その会合が秩序を守って円滑に進行するために最高の権限を与えられた役職です。会場においては、会長や理事などの役割を越えた絶対的な権限を持っているので、すべての参加者は SAA の指示に従わなければなりません。従って、クラブの SAA は会長経験者、RI や地区レベルではパストガバナーなどのベテラン会員をこれに充てるケースが多いようです。

国際大会などの大規模な会合では、ベテランのパストガバナーの中から選ばれた SAA を中心に、一般会員の中からボランティアとして参加した多数の副 SAA がこれを補助します。クラブにおいても、ベテランのパスト会長が SAA を務め、さらに会員数の 10%程度の副 SAA がこれを補助するのが好ましいとされています。

日本では、SAA がニコニコ箱を管理するという習慣が定着しているようです。そのために、会合の秩序を守るという本来の役割が軽視されているのはおかしな話です。

13 会長経験の意義

外国でロータリアンから名刺をもらうと、会長経験者は必ず PP (Past President) という肩書きを付けていることに気づきます。中には CP (Charter President) という肩書きを自慢そうに示す人もいます。

ガバナー、ガバナー補佐になるためには、クラブ会長を全期間経験することが義務付けられていますから、外国では、クラブ会長を経験することは、シニア・ロータリアンになるための出発点に過ぎないと考えている人が多いようです。従って、何時でもシニア・ロータリアンになれる資格として PP という肩書きが重要視されているのです。

日本では 20-30 代で入会する人は稀ですから、若くて会長に就任する人も稀です。従ってガバナーになるのも遅く、理事はさらに遅く、RI 会長を務めるのは年齢的に不可能というのが現状です。クラブ会長を務めることが、クラブに対する最後のお勤めだと考えてはいけません。なるべく若い内に会長を務めて、会長を務めたことが、ロータリーの世界で対外的に羽ばたく最初のステップだと考えて、PP という肩書きを大切にしてください。